

紅玉が不憫すぎるから俺が運命を変える。

あたたかい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

交通事故で命をなくし、なぜかマギの世界に転生することに。

練紅玉がすごいかわいそうだと思っていた主人公は、ちよūdい機会なので運命に抗い、歴史を変えようとする!!

注・最新刊ネタバレあり・原作既読推奨

注・オリキャラ・オリジナルジン登場

注・アンチヘイト的表現が一部あります。

目次

【第一章】闇の幕開けと紅玉

第一話『The end.』	1
第二話『New Born』	7
第三話『The Only Hope For Me Is You』	12
第四話『I'm Not Okay (I Promise)』	18
第五話『偶然という名の必然』	25
第六話『裸足の女神』	34
第七話『TIME』	41
第八話『BURN』	49
【第二章】王の器たちの計画と紅玉	
第九話『She』	60
第十話『HOME』	71
第十一話『RED』	80
第十二話『さよなら傷だらけの日々よ』	89

【第一章】闇の幕開けと紅玉 第一話『The end.』

2016年12月22日。

買い忘れていたマジ31巻を買った。

最終章に入ってから展開が目まぐるしい。キャラクターの姿もずいぶん変わった。

アラジンでかくなつたなあー…白龍は兄貴に似てきてんなあー…と感想を抱きつつ読み進めると、また煌帝国がピンチになったりそれを乗り越えたりしていた。

それにしても、練紅玉ちゃんはかわいいそうだな。

元々身分の低い皇女だったのに努力してジンを手に入れて將軍になつて。

それなのにシンドバッドとかいう奴のせいで煌にダメージを与えちゃつて、兄貴たちを罪人にされた。

彼女は煌のためになることをしようとかんばっていただけなのに。不憫だなあ…。

そんなことを考えて歩いていた俺は、左からやつてくる暴走トラックに気が付かなかつた。

俺、乙坂哲（おとさかてつ）は今日21年間の人生を終えた。

大学3年生、来年の就職活動に向けての緊張や不安を抱え、今日買ったマジを抱えながら人生に幕を下ろした。

後悔ならかなりあるが、仕方のないことだ。家族や友人は悲しむだろう。

家族といつても父は俺が小さい時に死んじゃつて、兄と母だけ。兄

貴にはすごい世話になっている。毎日食べているのも、毎日大学に行
けているのだって、大体兄のおかげだ。

兄貴は25で、大企業の正社員だ。兄貴は俺の尊敬する人だ。

そんな兄貴に恩が返せないのは、申し訳ないことだ。

別れを告げたかったなあ。

「君は愉快的な奴だな。後悔してないと言いながら、後悔しているじや
ないか！」

声が聞こえたが、聞き間違いだろう。なぜなら俺はもう死んでい
る。

なぜ、意識がある？

なぜ、考えている？

俺はまだ生きている？

話しかけられた？

誰に？

「やあ！僕が誰だった？！」

「僕はウーゴ。ここの番人さ！」

青い巨人が話した。

「ハア!!?」

思わずアホな声が出る。

喋れる。喉がある。

「俺はどうなってるんだ!!?」

体があることに気が付いた。おかしい。俺は死んだはずだ。しか
もこの青い巨人は…!!?

「ふむ。つまりね…」

巨人ー…ウーゴくんが大混乱状態にある俺に説明をしてくれた。
まずここは、頑丈な部屋。聖宮。マギのルフや、その他ルフの管理
をする場所だ。

そしてウーゴくんはこの聖宮の番人。

俺は確かにトラックにひかれて死んだが、なぜか俺のルフ（ルフが
現実世界にもあるとは知らなかったけど）が別の世界ー…マギの世界
観。に飛ばされてしまったらしい。

マギを持って死んだからか？

そして元の世界にも戻れない。聖宮の力では無限にある世界から
俺のいた現実世界を探すのは不可能に等しい。

まあ、戻ったところで、行くのは死者の世界だけだな。

そんな事情もあつて、俺のルフを大いなる流れー…まあ、自然？に
も戻すわけにはいかず（元から大いなる流れにないルフだかららしい
がよくわからなかった）、困ったのでとりあえず本人の意向を聞こう
とルフを実体化させたららしい。

「とまあ、こんな感じなんだ。」

「…なるほど………」

パニック寸前だった俺の脳は落ち着きを取り戻し、冷静に状況を考
えることができていた。

つまり、漫画とかでよくある転生ー…異世界移動。

予備知識があつたおかげですぐに呑み込めた。

「俺の意向つてことは、俺をこの部屋からこの世界に生み落とす…転
生できるつてことか？」

巨人に問う。

「うまくいくかはわからない。元々この部屋から送り出していたのは
マギのルフだけなんだ。」

「あつマギっていうのはね…」

「うまくいかなかったら？」

ウーゴくんの説明を聞き流して質問する。

「どうなるかはわからない。君のルフはこの世界のものとは違う。ひどいことになるかもしれない。もつとも、転生に成功したところで、何かしらの影響が出るだろう。例えば…」

「例えば？」

「今君が持っている記憶を残したまま赤ん坊としてきたりしてね」

「フン。いいじゃないか。記憶を残したまま生まれるということは未来がわかるということだ。もつとも、今がマジの時系列でいつぐらにかによるが。」

記憶があつたら、歴史を変えて紅玉を助けよう。

かわいいからな、紅玉は。

迷宮のジンの力を手に入れ、紅玉を守る戦士となろう。

「いいかい？もし記憶があつても、人に他の世界から来たなんて言っちゃいけないよ。それでも転生したいかい？」

ウーゴくんにマジのストーリーを知っているということは言っていない。

歴史を知っているということは大いなる流れに反することができるということ。

危険だ。本来あるべき流れを変えてしまうということは。マジの世界観では全ての現象事象が必然。紅玉が苦しむことだって本来変えられないものなのだ。

だが俺はそれをやる。

ウーゴくんには悪いが、このことは黙っておく。彼がこのことを知ったら転生なんてさせてくれないだろうからな。

「わかった。ウーゴくん。俺はやるよ。」

「そうか！わかった。無事を祈ってるよ。哲。」

今マジの世界では紅玉が何歳ーとかシンドバッドが何歳ーとか聞きたかったが、怪しまれるのでぐつとこらえた。

「転生したら俺はどんな人間になるんだろう。」

ウーゴくんに聞いてみる。

わかっていたが返事は、

「それはわからないんだ。ごめんよ。」

何もわかんねーなこいつ、と思っってしまった。この調子だと、よくある転生したから得られた力なんかもなさそうだ。

どうなるかは運か。人生ハードモードだな。

「じゃあ行くよ哲。たぶん、いやきつとこれでお別れだ。」

ウーゴくんが言う。そうだな。これからの第二の人生でアラジンに会わない限りお別れだ。

「あっ！最後にひとつ！」

「なんだい？」

「どうして俺を転生させようとしたんだ？流れに合わないルフが迷い込んだだけなら、君の力でどうにか処理できた、そうだろう？」

「…それは、君が、」

ウーゴくんは一瞬言葉につまって、悲しい顔を見せた。

「君がまだ若かったからね。人生をぜんぜん楽しめてないまま、死んでしまった。そんな友達を思い出しちゃってね。」

それは知っている。ウーゴくんの元いた世界、アルマトランでの話だろう。

「はっ、はは！こんな青い巨人に友達なんてね！おかしいだろう？さっきのは忘れてくれよ！」

「ありがとう、ウーゴくん。」

俺は心から感謝を伝えた。

「ふっ、君にはなんでも話してしまいそうだよ」

ウーゴくんが笑う。俺も笑顔を見せた。

「さて行くよ、今度こそお別れだ。」

開けー…ゴマ!!

マジの世界に転生し、体を鍛え、練紅玉を守り、(青春を楽しみ)、歴史を変える！

ウーゴくんには悪いが、俺は運命に抗う！これが俺の第二の人生だ
！やるからには、楽しむ!!
聖宮の正面の大きな扉が開き、俺をまぶしい光が包んだ。

第二話『New Born』

気付いたことが2つある。

ひとつ、転生に成功したようだがウーゴくんの言っていたように、生まれてきた俺は変だったこと。

まず、赤ん坊なのに物心がついており、前世の記憶がある。

これは計算通りだ。このまますすくと育ち、すぐにでも紅玉を守る準備を始めることができる。まあ、二年はおとなしくしておいた方が良いだろう。

この俺の前の世界の記憶も少しおかしい。ところどころ忘れている。

まず、自分の名前。家族の名前。友達の名前。

さらには、大学や街の名前など。名前に関わるものは大体忘れてしまったらしい。

赤ん坊の小さな頭には全て入りきらなかったか。気にすることではないが、心にぽっかり穴が空いた気分だ。

マジについての知識があっただけよしとしたい。

次にふたつ目に気付いたことだが、

転生についてくる特典はあった。

もしくは、運が良かっただけかもしれないが。

生まれた時にすでに意識はあつて、違和感を感じていた。

出産を手伝う人数が多い。

20人以上はいただろう。

さらに、俺が産まれた部屋もかなり大きかった。

大体わかっていると思うが俺は王族の子息として生を受けた。

次期王として、慎重に、皆が見守る中、産まれたのだ。

王の器として。

俺は鬼倭王国（きなおうこく）の第二王子として生まれた。

第一王子ではないことは残念ではなく、むしろ好都合だった。

まず、第一王子では次期王の候補筆頭のため、自由に世界中を動けないだろう。

それはまずい。紅玉を守るためには煌帝国に行かなければいけない。

紅玉を嫁に迎えればいいと思うかもしれないが、それは彼女が望まないかもしれない。

俺は紅玉を守りたい前に、紅玉を幸せにしてやりたい。（この世界に転生してからは、この思いが強くなっているような気がする）

しかも、第一王子の健彦（たけるひこ）は、あのシンドバッドと同じ年だ。

紅玉と仲良くするのに、あれほど（12歳差）歳がはなれてはいけけない。はずだ。

俺は健彦が7歳のときに生まれた。まあこの歳差だったら大丈夫だ。紅玉も心を開いてくれる。

なによりまず、物語終盤とかだったら、もう彼女は傷ついてしまっている。

俺の目的が達成できない。

そんな思いもあって、最初に健彦の幼い間抜けな顔を見たときは、胸をなで下ろした。

とにかく、紅玉を守る力を手に入れるのには最高の場所、絶好のタイミングに生まれてきた。

俺は3歳を迎えたこの春から計画を始動した。

まずは体力をつける。小さいながらも、鬼倭の屋敷を駆け回った。父母、それに鬼倭の人々は元気な子だと笑った。

これは結構つらい。屋敷が広すぎる。

4歳からは基礎的な学問、教養を身につける。

転生する前は日本語ではない言葉が理解できるか心配だったが、案

外すんなりと習得した。

幼児の頃は脳の発達の際の勢いが激しいと聞いたことがあるが、あれは本当らしい。

なんでもみるみる覚えてしまう。きつと転生する前より頭がいい。

5歳からは剣術などの武芸の稽古を家来につけてもらった。

俺はもともと運動には自信があったが、剣術は難しかった。

しかし、冬に入る頃からはなんとか様になってきた。

健彦とも手合わせをするようになった。健彦は12歳。彼は俺の腕にかなり驚いていたようだった。

父母は強い鬼倭の男になれると俺の努力を褒め、鬼倭の人々の中ではちよつとしたニュースになっていた。

健彦も負けじと武芸に精を出しているらしい。

6歳になると、朝は鍛錬、昼は稽古、夜は勉強。

こんな幼児が今までいただろうか。いや、いない。

この4年間で俺はだいぶ力を蓄えた。しかしまだ足りない。紅玉を守るためにはこれからも努力を続ける。目標は、ムー・アレキウスより力強く、練紅炎より勇猛で、シンドバッドより社交的で、アリババより優しい。

そんな男に、私はなりたい。

この歳になってから、煌との貿易船や通信使についていくようにした。というより頼んで連れていってもらった。

そのときの煌は戦争真っ直中で、街に活気があまりなかった。

なぜ、煌に行くかといえば、今年、紅玉が生まれるからだ。

それだけではない。後々のためのパイプを作っておくのだ。

皇帝の白徳、白雄殿下や、白瑛、紅炎や紅明に挨拶をした。もちろん玉艶にも。

白徳大帝の血を分けた両皇子は俺によくしてくれた。よくできた人たちだまったく。

白徳大帝や彼らが玉艶によって暗殺されるのは許せない。そう思ったがまだ自分にそれを止めれる力がない。考えも力もなしに突っ込めば消されてしまうだろう。

紅玉には会えなかったが練家に名前を知ってもらえた。また、思わぬ収穫もあった。

上出来だ。

10歳になったころ、練紅炎が迷宮（ダンジョン）を攻略し、ジンの金属器の力を手に入れた。

まだ幼い王の選定者、マギであるジユダルに導かれたのだ。

もちろんだがジユダルにも挨拶をしてある。だが彼には力を借りない。

もつとふさわしいやつがいる。今は待つ。時が来るのを。

12になった。今年は大忙しだ。まず、白徳大帝と白雄、白蓮両殿下が謀殺される。

今まで鍛錬に鍛錬を重ね、強さを手に入れた。学問に打ち込み、頭脳を鍛えた。

計画を第二段階に移す。

桜が散る季節。まず第二段階の始めは国内からスタートする。

全ては紅玉を守るため。

辛い試練も乗り越えよう。

日が傾き始め、仕事を終えた侍たちが屋敷へと戻ってくる。

夕日を浴びてオレンジに染まった屋敷の廊下を渡る。

大きな扉の前で息を吸い込む。大丈夫だ。

「兄上、ご相談があります。」

大きな襖から声がした。

「入れ。」

運命を変える。

―まず白雄、白蓮両皇子を救う。

第三話『The Only Hope For Me Is You』

鬼倭王国。煌帝国の東に位置する小さな島国だ。

以前は鬼倭の中でも多くの国が存在し、対立しあい、争いが絶えなかった。

私は父上である、先王とともに鬼倭を駆け回り、私の代になってようやく鬼倭を統一した。

今では巷に笑顔があふれ、侍たちは武術をみがき、平和の中で諸外国との戦争に備えている。

私は鬼倭を平和にした大王として皆に慕われ、支持が高い。

そんな私に息子ができた。一人は健彦。私に似て、武術が得意で、今（健彦は19歳だ）となつては剣術で奴に敵うものはいない。

しかし少々やんちゃ者で、こつそり屋敷を逃げ出しては、遅くまで街の者と出かけていたり、街の道場に繰り出したりしている。

悩みの種ではあるが、あれで鬼倭の者からは人気がある。まさしく鬼倭の男という勇猛さ。

それに比べ次男の乙彦（おとひこ）は静かな奴だ。

武芸や学問ばかり鍛えていて、いや、良いことなのだが、少し鬼倭の侍としては心強さとかワイルドさというのが足りない気がしてならない。

しかし優秀ではある。小さい頃から鍛錬にはげみ、いつからか煌など諸外国の外交に同乗するようになった。

なぜかはわからないが。

理由を聞いても鬼倭のためだの調子のいいことを言っただけです。

そう、奴は何を考えているのかわからない不気味さがある。

俺が引退したら健彦に王位を譲り、乙彦を外務大臣につけようという将来のビジョンがあるが、乙彦が不安であるのだ。

その不安は高まる一方だ。

「旅に出たいのです」

普段あまり俺とは話をしない乙彦が真剣な目で言ってきた。驚いたが、乙彦のことだからこういうことを言い出すとは心の中でわかっていた。

やはり、こいつはよくわからない。

「のう、父上。許してやってくれんか？乙彦はこれまでずっと鬼倭のため尽くしてきたじやろう」

どうやら健彦を味方につけてきたらしい。健彦とは昔から仲がよかったからな。

確かに乙彦の働きぶりは年齢を考えなくても異常なほどである。そんな奴のわがままだ、聞いてやってもいい、何しろ、王位継承権は健彦の方が上だ。

しかし、

「何が目的だ？」



ワシこと健彦は驚いていた。

昨日の晩に弟の乙彦がワシの部屋を訪れ、旅に出るなどと言い出した。

仮にも一国の王子、そう簡単に旅に出れるものではない。

しかし乙彦はいつになく真剣な面持ちだった。こんな弟の顔を見

たことがあっただろうか。

剣術の稽古でも見せないその顔は、焦っているようにも見えた。

乙彦は旅の目的を説明しだした。

練紅炎が手にしているというジンの力を得るため、世界中に出現している迷宮（ダンジョン）を攻略すること。

ジンの力を手に入れば魔法のような超能力を使えるようになる。迷宮の場所を知っているかと聞けばアテがあるらしい。いつそんな情報を掴んだのか。

しかし愛する弟の頼み、ワシは父上に話すのを手伝ってやると約束した。

驚いたことに、父上はすぐに許可を出した。なんでも深く考えない鬼倭の男らしさからだろうか。

というより乙彦がジンの力を手に入れることは鬼倭にとってメリットだらけだ。戦力の強化になる。

旅とはいえ、迷宮を攻略しにいくだけ。鬼倭の男は強い。すぐにも攻略して帰ってくるだろう。

と、父もワシも思っていた。

「ありがとうございました、兄上」

国王の部屋を出て屋敷に戻る道の途中、乙彦が口を開いた。

「ワシらは兄弟の仲、気にすることはないぜよ！」

思ったことを伝えた。まだ幼い弟は、にこつと笑顔を見せた。

「…しっかし、あの堅物の父上があんなにあっさり許可を出すとはもう…！父上もやはり、鬼倭の男ってことかのお！」

父上は乙彦の旅の目的を聞くと、失敗は許されんとだけ言って、すぐに旅を認めた。

それだけ、この乙彦が実力を持っているということだろうか。

「乙彦、いつ出るんじや？迷宮に行くなら、兵が必要ぜよ」

「いえ、旅には俺一人で行きます」

何を言っている。聞けばあの練紅炎でさえ何千という兵を連れていったというのに。

「乙彦…それはさすがに…」

「兄上。」

ワシの言葉を遮るように、乙彦が呼びかける。

「今までお世話になりました。俺は、明日出ます。」

いつになく、落ち着いていた。

「鬼倭を、頼みます。」

一瞬、乙彦の言っている意味がわからなかった。

しかし、すぐに理解した。ワシは鬼倭の一將軍を任されている。乙彦が迷宮を攻略している間、変わりが無いように、という意味だろう。

いや、そうだと決めつけ、深く考えないようにした。

去っていく弟の背中、年齢に合わずいぶん大きく見えた。



旅立ちの日になった。というより夜が明けたただけだ。

昨日は兄と父に別れを告げた。鬼倭の男らしく、あまりじっくり話さない。

さて、旅の内容だがもう決まっている。まず、船で煌帝国を目指す。ジンの力を得るためにジュダルの力は借りない。組織に媚びを売って目をつけられるのは行動しにくくなるだろう。

なので別口で行く。

煌帝国からレーム帝国を目指す。

まずは煌に行くため船を出す。

用意周到、船はもう岸边につけてある。船の操縦技術は、貿易船などに同乗した際に教えてもらったので心配ない。

静かだ。まだ朝が早く、皆が起きる時間ではない。日もさつき登り始めたところだ。

聞こえるのは波の音、鳥の鳴き声、それに――

「乙彦さま?」

ふいに背後から声をかけられ、驚きのあまり前に倒れそうになった。

危ない。もう少しで海に落ちるところだった。しかし、この程度で驚くとは俺もまだまだか。

「なんだ…七海か…」

振り返ると、8歳くらいの少女が立っていた。彼女は七海（ななみ）。妹だ。

「ずいぶん早起きなんだな」

「兄上さまが今朝出ると聞きまして…」

「そうか」

かわいいなあ。

……いかんいかん。俺にロリコンの気はないが、そっち側に引き込まれてしまいそうな気がした。

もともと、七海とはあまり話さない。なぜなら、俺は日が登っている間ずっと鍛錬をしていたからだ。

しかも、兄弟がやたら多いから、会うのも一苦労なのだ。

「乙彦さまは、」

「うん?」

「乙彦さまはいつ帰られるんでしょうか?」

返事に戸惑った。もともと帰る気はなかったが、そもそも生きていられるかすらわからない。

今ごろ、不安が襲ってくる。

笑えるな。一度死んでいるというのに、なぜ死に恐怖をいだくのか。

「すぐ戻る。しばしの別れだ、七海」

彼女を心配させる必要はない。思ってもいないことを言った。

碇を引き上げ、船を進ませる。

風はばつちりですぐ焔に着くだろう。

今まで育ててくれた鬼倭とは別れる。鬼倭は楽しかった。

俺の目的は紅玉を護る力を手に入れることだ。そう自分に言い聞かせた。

恐怖におびえている時間はない。



「おい!!俺に力を貸せ!!」

倭乙彦は暗い谷底に、暗黒に呼びかけた。

……反応はない。

「俺はウーゴくんを知っている!!」

——今度は反応があった。

大峡谷の反対側から”彼”は現れた

「やあ、オトヒコ。」

ユナ——…大峡谷のマジ。俺の唯一の希望だ。

第四話 『I, m Not Okay (I Promi se)』

練白雄と白蓮を救う。

俺や紅玉にあまりメリツトがないと思うかもしれないが、そんなことはない。

まずこの両皇子と白徳大帝が謀殺される大火の事件だが、練玉艶が仕組んだものである。

目的は二つ。自分の操り人形と化している練紅徳を皇帝にして政治の実権を握ること。

もう一つは、組織、もしくは練玉艶の本性の情報を手に入れた白雄・白蓮の抹殺。

この惨劇を止めることは不可能だろう。組織の力は強大だ。むやみに立ち向かえば、俺の方が消されるだろう。

しかし、白雄・白蓮は失うには惜しい人材だ。

まず大前提として紅玉のことを優先して考える。

紅玉を守るためには、紅炎と手を組み、紅炎に仕える中で、紅玉を守るのが手っとり早い。

紅炎と手を組むのは簡単なことではない。

俺は得体の知れない鬼倭王国の第二王子。ジンの金属器を手に行っているくらいで仲間に加えるほど紅炎は甘い男ではない。

しかも、俺が就きたいのは仮にも皇女(もちろん紅玉)の護衛だ。多大な信頼を勝ち取らなければいけない。

そこで俺は考えた。

白雄、白蓮皇子が死んだと見せかけ俺が救う。

白雄たちには命を救ったことを借りに俺の仲間になってもらう。すると俺に、組織を欺いて白雄たちを救ったという実績ができる。

また、白雄たちが仲間になっていて、紅炎も俺に信頼を抱くだろう。

これで紅玉を守るポストに就けるといふことだ。

しかもまだメリットがある。

白雄たちが生きていて、ずっと後に起こる焯の内戦を止められるかもしれない。

その内戦は、大火の事件の生き残りである白龍が、自分こそ正しい焯の皇帝だと、紅炎に戦いを仕掛けて始まる。

しかしこの内戦は確実に紅炎サイドの負けになる。

シンドバッドが裏で糸を引いていて、七海連合とかいう国際同盟の国々と一緒に白龍側に参戦するのだ。

許せん、シンドバッド。

結局、紅玉の敬愛する紅炎たちは流刑になってしまう。

それはいかん。紅玉にとって尊敬できる兄たちを失うのは不幸だ。

しかもこれで焯の主力がごっそり滅つたのを良いことに、シンドバッドは焯が確実に自然消滅する世界を作り出す。

まったく、紅玉にとって悪いことばかりだ。

しかしこの負の連鎖を止めることはできる。

その鍵が、白雄・白蓮だ。

内戦が始まらないようにするためには白龍を説得することだ。

しかしこれが難しい。白龍が心を許していたアリババやアラジンでも彼を説得できなかった。

しかし、兄である白雄の説得になら応じるのではないか？

彼は怒りで強くなったから、玉艶を殺してくれるまでは泳がしておいて、そこでネタバラシだ。

これで効率よく、紅玉が幸せになる世界に導けるといふわけだ。

パーフェクト。我ながら良いことを思いついたな。



「ふうん。白雄・白蓮皇子が暗殺される…」

「そうだ。彼らは組織に狙われている。…見捨てることはできない。」

大峡谷―…。

レーム帝国の南端に位置する未開の地、暗黒大陸に存在する、巨大な谷。

そこはなぜか底も対岸も見えず、まるで世界がここで終わっているかのような異常な光景が広がる。

その向こう側には、強靱な肉体を持った最強の戦闘民族、ファナリスの村があるといわれている。

そして、大峡谷の奥底には、伝説の魔法使いであるマギが暮らしているともいわれている。

「…それ、口に合わなかったかな？」

この、お茶の味の加減を聞いてくる男こそそのマギ、ユナンである。

「いや、おいしいけど。」

「そうか、良かった…。人にお茶を出すのは久しぶりなんだ。」

ここは大峡谷のユナンの家(?)である。

大峡谷の入り口で初対面を果たした俺たちは、立ち話もなんだということでここに招かれた。

そのときユナンに浮遊魔法をかけてもらって崖を下りたが、あんなに気持ちの悪いものだと思わなかった。

ジンを手に入れたら、魔装で空を飛べるようになるわけだから、こんなものには早く慣れておかねば。

「君の話は、よく耳にするんだ…。なにせ、ブキミな鬼倭王国の大層優秀な王子らしいからね」

「えっホントに?」

思わず聞き返してしまった。俺は有名人だったのか。それは知ら

なかつたな…。

「オトヒコ、君は一体何者なんだい？」

確かに何者かと聞きたい気持ちはわかる。むしろわかりすぎるくらいだ。

俺はまだ12のガキなのに、一人で旅をして、煌の皇子を救うためにジンを手に入れようとしている。

しかも、この世界の知識がかなりある。未来に起こることさえ知っているのだ。

もちろん俺はマギがサンデーで連載している世界からこの世界に転生してきたので、当たり前といえば当たり前なのだが。

しかしこのユナンも転生者だ。何回もマギとして生まれ、この谷を守っている。

「似たような者だ、お互い。」

ユナンは笑った。

「そうかい。」

「君をジンの迷宮へ導くことはぜんぜん構わないんだ」

実をいえば、という感じでユナンが話を切り出した。

「えっ？」

「君の周りのルフを見ればわかるよ。希望と情熱に満ちていて、使命を果たそうとして必死になっているような雰囲気だ。……嫌いじゃないよ。」

まるで占い師だな。

そんな感想をふいに抱いた。

「…何度でも憎しみあい、戦い合う、この辛くて悲しい世界を、良い方向へ導いてくれるような、そんなことを君からも感じたんだ、オトヒ

コ。」

君から、も、ね。

ユナンが選んだ王の器が今の世界に一人いる。

七海の覇王、シンドバッド。

「じゃあユナン、頼む。」

もしかしたらさっき俺はユナンに王の器としてシンドバッドに近い位置に分けられたかもしれない。

奴と一緒にするのは気に食わないが、力を手に入れるために俺を選んでくれたことに感謝しよう。

「ああ！君にぴったりなとびっきりのジンを出してあげよう！」

「…ありがとう、ユナン。」

まだ道のりは長いが、ようやくここで、俺の紅玉に捧げる人生を共にするジンに出会えるわけだ。

もちろんのことながらワクワクしている。

まだジンの力を手にしている者は少ないから、選び放題というわけだ。

ベリアルとかだったらどうしよう？ヴィネアが出たら困るな。

いや、とにかく何でもまずは攻略しないとな。

これまで鍛えてきた力の見せ時だ。

どんな敵が現れたって、斬って進むだけだ!!



本当に君は変だよ、オトヒコ。

僕と君が似たような存在だって？

全然違うよ、オトヒコ。

君はウーゴくんを知っているといったけどそんなはずはないんだ。

なぜならウーゴくんのいる聖宮に還り生まれ落とされるのはマギ

のルフだけ。

君はマジじゃない…。なぜ、ウーゴくんのことを知っているんだい？

あと、僕のことも。

君はどう見たってまだ幼い子供だよ。

そんな君がなぜ、最近現れだした（僕が出したのもあるけど）迷宮のことや、僕のことを？

シンドバッドに聞いた？まさか。

もしそうだったら君のことを僕はよく知ってるはずだよ。

僕は君のことを全然知らない。

君は僕のことどころか、僕でさえよく知らない組織のことまで知っているようだ。

それに君のルフ…。

君の周りのルフは確かに希望に満ちて白く光輝いてるんだ。

でも、なぜだい？

君の身体に宿るルフは真っ黒だったよ。

君は、自分のことを多く話したくはなさそうだったね。

まるで不都合でもあるかのように。

君の言うことは信用性があるよ。

実際、煌で暗躍する組織は、白雄皇子たちの命を狙っているようにも思える。

でも君が信用できないんだ、オトヒコ。

君が白き王の器であるのは間違いないんだけどね。

悪いけど君には、ちよつとした魔法をかけさせてもらおうよ。

杖に力を込め、ジンを呼び出す。

すると大峡谷の底のど真ん中に、光と共に巨大な建物が現れる。
その建物は西洋風で、まるでレームの大使館のようだ。

「これが、迷宮…!!」

オトヒコが驚いたような声を上げる。

我が王の器よ、この迷宮が攻略できるかな？

「このジンはくせ者だ、でも君に絶大な力を与えるだろう。攻略できれば、だけどね。」

「わかっている。」

そう言うとおトヒコは鬼倭製らしい、身丈にあっていない大きな刀を持って迷宮の入り口へと進んでいった。

恐れなしか、本当に君は子供かい？

なんてね。聞くまでもなく君は子供じゃないよ。

「あつオトヒコ。」

すでに入り口へ入ろうとしていたオトヒコの足が止まる。

「僕は今回攻略についていけないよ。お手並み拝見つてところだね」

「望むところだ」

オトヒコが笑ってみせた。

「あと、」

「この女の子は連れていかないのかい？」

僕は峡谷の僕の家の前で、僕の隣で荷物を持って立っている娘を指して言った。

気になってただけど、君についてきたこの子は誰だい？オトヒコ。

第五話 『偶然という名の必然』

レームに行くのは時間がかかる。

鬼倭を出て煌に着いた、倭乙彦。

煌から出ている移動船を使いレームを目指すが、煌からレームへ直接行ける訳ではない。

最短で、煌、バルバッド、アクティアと船の乗り継ぎをしなければいけない。

時間はかかるが、広い砂漠や天山山脈を越える陸路よりかは遙かに短い時間で行けるし安全だ。

飛空艇などあればいいが、あれははるか未来でシンドバッドが作ったものだ。

飛行機や車の便利さが身にしみてわかった。

出発して3週間。何度も国々の港を経由し、やっとバルバッドに着いた。

たくさんの島国が集まってできているバルバッドはまだアリババクンのお父さんが治めており、治安は良く、人々に活気があふれ、経済は潤っているようだった。

しかしそれでもスラム街があつたりと、貧富の差はあるようだ。

もつとも、この戦争ばかりのご時世、一つの国に一つは社会問題があるものだ。

そんなものは鬼倭にはないと思っている鬼倭の人々は少し陽気すぎる。

バルバッドを出て一カ月くらい。

アクティアに着いた。

アクティアは煌、バルバッド、レーム、バルテビア、ムスタシムなど大国に挟まれた位置にあり、各国との貿易や移動の中継地点として賑わっている。

しかし海賊や盗賊が頻繁に出るようになり、あまり治安はよろしくなかった。

最近は盗みの手口が巧みになっていると聞いた。

金持ちのボンボンに見られて目を付けられるのはめんどくさい。

俺は身を飾る金品を最小限に減らした。もちろん、鬼倭の風習としてつけられている、鬼の角を象った頭飾りも外した。

しかし、鬼倭で父上から授かった大きな刀はどうにもできず、腰に下げたままだった。

頭隠して尻隠さずとは、まさにこのようなことだろうか。

「あなた、すごい大きい刀を持つてるんだね！」

そのアクティアの港、移動船の発着場でのことだった。

移動船に乗ったその少女は、出入口の近くで一人アクティアの街並みをぼんやり眺めていた俺に突然話しかけてきた。

少女は俺と歳は同じくらいで、背丈は俺より少し低かった（もつとも、俺は結構同年齢の中ではかなり大きい方だったのだが）。

前髪を後ろでまとめている、全体的に短い髪型からは、独特の雰囲気を感じた。

「これ、あなたの？誰かの荷物持ちをしてるってわけでもないみたいだけど…。」

少女はいきなり話しかけられてちよっぴり驚いていた俺に構わず話し続ける。

いや、鬼倭にも歳が近い女の子はふつうに居るし、なかなか親しい者もいる。

前世でも彼女こそ小学生の時しかいなかったが、女性とはぜんぜん話せたのだ。

俺が彼女に対して驚きの感情を抱いてしまったのは、彼女の容姿にある。

一言で言えば、美人だった。

容姿端麗、肌がきれいで美しい。顔立ちは俺の好きだった女優を幼くしたようだ。

自分はロリコンではないと思っていたが、というより胸に刻みつけていたが、彼女を見て綺麗だと思ってしまった。

「一人旅なの？」

「えっ…とー、ああ、はい。この剣も俺ので。」

つい変な返事になってしまった。

マギの世界に転生したときこそ何でやねんと思ったが、こんな美少女が気さくに話しかけてくれるなら良いものだ。

悪いな紅玉。俺はロリコンかもしれない。(しかし今紅玉はロリな訳だが)

「へえー!! そうなんだ! すごいね!」

「…そうかな」

「そうだよ! その歳で一人旅なんて!! あなた、レームに行くの?」

この少女も一人旅のようだが。

俺が頷くと、

「レームってすごいところなんだよ!」

と、レームについて語り始めた。

しかし、このノリは近所のオバハンが学生に絡むノリだな。

完璧な人間などいない。しかも楽しく話せているのだからいいじゃないか。

と、頭の中に出てきた近所のオバハンを引つ込めた。

「ゴロツセオっていう闘技場があつてね、ここがいつも賑わつてて…」

彼女の他愛ない話は聞いていて心地よかった。

純真な彼女を見ると癒される。幸せになる。

このまま何もなく元気に育つてほしいものだ…。

彼女が話していると、すっかり日が暮れて、夜になっていった。

空一面に広がる星空の下、俺はいつの間にか、眠りに落ちそうになつていった。

長旅の疲れもあつてか、俺は案外すぐに、少女と二人で座っていた床でぐっすり眠りに落ちた。

武術の究極の技とは、カウンターである。攻守一体、隙のない攻撃はどんな相手でも避けられたモノではない。武を極めようと志す者は、どんな形でも、カウンターを身につける。乙彦も鬼倭でその全てを習得した。反射で技が出るほどに。

俺が眠っているとき、俺の方に伸びてきた手を、セキツイは見逃さなかった。

俺は床に座り、背は壁にもたれ眠っていた。そのときだった。刀の鞘が動くカチャリという音。

それだけで、俺の脳は一気に覚醒し、体は見に染み着いたカウンターを始めていた。

誰かが俺の刀に触れたわけだ。盗みだろう。

鞘に触れている相手の腕を左手で掴む。

どうやらこれは相手の左腕だ。

ぐいと左手を引っ張り相手の体勢を崩す。

相手の体はいとも簡単に動いた。

次に自分の右手で相手の頭を地に叩きつける。

左手を引いた際に体の軸をひねり、ノータイムで頭を正確につぶす。

また、その反動で、右足。

地にうつ伏せで倒れた体を押さえつける。

右足が動いたことで、下半身全体が動き出す。

相手を押さえつけることはとにかく教え込まれた。

倒れている相手の体にまたがって乗る。

掴んでいた左手に逆の力が加えられ、相手は悲鳴を上げた。

すかさず俺は自分の右手で相手の右手首を掴み、相手の背中に左手とともに押さえる。

洗練された無駄のない動き。

相手を今の状態に押さえつけるのに3秒もかからなかった。

一連の動きを終え、俺の思考は起き始めた。

目覚めは最悪だ。

まだ日は昇っていない。

夜の三時くらいだろうか。

必死に抵抗しようとする相手を見た。

力はあまりなく、体も小さい。

全く、どんな盗賊なんだ。

「…お前、何者だ!？」

盗賊に問いかける。

反応はない。

俺は近くにかけてあったランプを右に掴み、盗賊の顔を照らした。

顔はまだ幼い。俺と同じくらいの年齢、髪は短いが、女のような。というより…

「…お前、夕方の奴か」

そいつは、移動船の中で俺に話しかけてきた少女だった。

「もともと、俺に盗みを働く目的で近づいた訳か」

ちようど持ち合わせていた縄で彼女の両腕を縛り、変な動きができないようにした。

こいつは、国軍に突き出すか。

こんな少女が盗みをしなければいけないなんて辛い現実だ。

「他に仲間がいるのか？この船の中に」

「…いない」

……ん？

疑問が頭をよぎった。

「…君は、俺から剣を盗ったら、どうするつもりだったんだ？」

「…売る」

「いや、それは知ってるよ。でも、そこまでどうやって行く？この狭い船で隠し通せると思ったのか？」

「…」

この移動船はここからはレームに一直線だ。

レームまではあと3日ほどだろうか。

そこまで隠していける訳がない。そんなサイズじゃない。

泳いで行けるほど陸は遠くないだろう。

てつきり仲間と協力して逃げたり隠したり俺を殺したりするのかわかったのだが、そうでもないらしい。

一つわかったことがあるが、この娘は頭が弱いらしい。

「相手が悪かったな。俺は倭乙彦。鬼倭王国の戦士だ。」

王子だということとは適当に隠しておこう。

「…なあ。なんで君みたいな子が盗みなんてしてるんだ。しかも明らかに無謀な。」

「…」

◆◆

私はレイ。

名字は、知らない。

私はアクティアの貧しい夫婦の家に生まれた。

母は病気がちで、父がよく看病していたのを覚えている。

父は王国軍の一兵士だった。

あまり偉い身分じゃないけど、なんとか私たちを養えていたと思う。

そんなある日のこと、父が戦争で死んでしまったと聞いた。

母は病気で働けない状態だったので、私は働くことにした。

近所の料亭に頼み込んで、雇ってもらった。

私はがんばってよく働いた。

運よく私は母に似ず、健康、健康すぎるくらいだった。

なので働いて、なんとか母にご飯を食べさせてあげられるくらいにがんばった。

しかしそんな生活も終わりを告げた。

母は病気で死んでしまった。

合わせたように同時期、私が働いていた店も潰れた。

原因は、主人の奥さんが店の金を持って出て行ってしまったこと。

家や服を売って生活費に当てたが、それにも限界がきた。

私は盗賊に仲間入りした。

ずっと真っ直ぐ生きて、日の光を浴びていける生活をしてきたが、それではうまくいかないことがある。

ただ、それだけだ。

盗賊団は中規模で、人数こそ少なかったが、私に良くしてくれた。

去年から入った盗賊団だったが、私は盗みがヘタクソであるらしく、成功率はゼロ%だった。

私は普段、みんなの料理ばかり作っていた。

そんなときだ。

「レイ、あいつの剣だ。」

アクティアの移動船に乗る少年に私たちは目をつけた。

見れば、彼は装飾品をたくさん持っているようで（防犯のためか、それらを外しているところだった）、バカにでかい剣を提げていた。

「レイ、お前行ってこい。」

金を持つていそうで、間抜けな面をしている。

貴族とか、そういう出身のボンボンだろう。

作戦はこうだ。

気さくに彼に話しかけ、親しくなり、彼が油断したところで盗む。

これなら私にもできそうだ。

なぜ私に任されたのかはわからないが、まあお世話になっているわけだから、役に立とうと思った。

盗んだ後のことは特に考えず、私は作戦を開始し、船に潜り込んだ。

「お前、それはハメられてるぞ。」

こんなことを言う彼……オトヒコと言ったか。彼はかなりの強者だった。

証拠に今、両手首を縄で縛られ、逃げることもできない。

「もともとお前を船に置いていって、お前とはもうバイバイということだな。」

「…そんなことない！」

確かに失敗ばかりの私一人で行けと言われたときは疑問に思った。

しかし、彼らに限って、

彼らに限ってそんなことはない、はずだ。

「あるんだよ。辛いかもしれんがお前はそいつらに騙されたんだ」

「…そんな…」

私は悔しくなって、苦しくなって、涙を落とした。

どうして私ばかりこんな目に…。

「…フン。お前は国軍に突き出す。盗みは罪だ。牢屋の中でたっぷり後悔するんだな。」

「…」

わかっていたことだ。

今までだって、何度も捕まりそうになった。

いつかこうなるのだと、わかっていた。

今がそのときだったただけだ。

「命乞いみたいなのはしないのか？」

彼が表情に笑みを含んで聞いてくる。

「…誰が…」

「誰がそんなことをするものか。」

私にもプライドがある。

覚悟がある。

お前みたいな金持ちにはないかもしれないけどな。

「…お前、チャンスが欲しいか？」

第六話 『裸足の女神』

レーム帝国。

煌やバルテビアと並ぶ軍事大陸でありながら、その国風は非常に優雅である。

街には娯楽施設が立ち並び、水道はきれいで、経済も安定している。まさに理想の国といったところか。

この美しいレームを守っているのが、マギたるシエヘラザードである。

彼女には色々な逸話があるが、それはまた別の話だ。

「…マギはもう二人いる。一人は煌帝国に。」

「もう一人は？」

「…暗黒大陸。」

王の選定者、マギ。

世界に三人しかいない大魔法使い。

一人はここ、レームで200年もの間、最高司祭として君臨しているシエヘラザード。

一人は新興国の煌帝国でその將軍らに力を与えている、ジュダル。そしてもう一人、世界中を旅しては迷宮を出したりひっこめたりしている、暗黒大陸の大峽谷を守るマギ。ユナン。

王たる力、ジンの金属器を手に入れるためにはマギに頼み込むのが一番だと、乙彦は考えていた。

するとまず、全くお互い面識のないシエヘラザードはダメだ。

ジュダルもダメだ。彼は自分と敵対するであろう練玉艶とつながっている。

するとユナンということになる。

乙彦はユナンに賭けていたのだ。

「殿は何でも知ってるんですねー」

「その呼び方はやめろ。あとふつうに話せ。」

俺を殿と呼んでくる金髪の少女は、レイという。

なぜ俺についてきているかと、それはあの夜のことだ。



「おまえにチャンスをやろ。もう一度人生をやり直せるチャンスだ。」
俺は両手を縛られている彼女に提案する。

彼女は何を言っているのかわからない、とでも言いたげな驚いた表情をしていた。

「俺に雇われろ。そうすればお前の住むところ、食べるもの、着る服を保証する」

「金持ちの家でダラダラ飼われるのは御免だね」

「誰がそんな事を言った。少なくともあと三年間は旅だ。お前はあくタイプに働く。」

彼女は意表を突かれたようだった。

コイツは俺をなんだと思ってるのか。

俺は紅玉を守るポジションに就くため、下準備として世界中をまわらなければいけない。

「俺は鬼倭王国第二王子、倭乙彦。俺はある目的のために世界をまわっているんだ。」

「ええー……王子様?!?どうりで…」

彼女を仲間にするのも紅玉のためだ。

彼女はなかなか使えるらしい。

世界中をまわるにあたり、一人では不便なことがたくさんある。

「だが簡単には雇わない。条件がある。」

「条件…」

食いついている。

俺の王子という立場や旅をするということに興味があるのだろう。

「一つ、まず盗賊稼業からは足を洗うこと。旅の中で変な気でも起こして変なことをすると困る」

「…それくらいなら…」

「二つ目だ。俺の目に狂いが必要なお前はおそらく使える人間だ。手放したくはない。そこで、俺がもういいと言うまで俺の元にいること。半永久的契約だ。」

「……………」

「次だ。武術を磨くこと。俺は世界のあちこちから敵対視される存在になるだろう。いや、なる。そんな俺の近くで仕えるのだ、半端な戦闘力ではすぐ死ぬ」

「武術…」

「最後だ。俺と話すときは普通に話すこと。」

「…………え？」

「これらの条件をのむなら、お前の罪もなしにして身分も保証してやる。どうだ？」

彼女は困っているようだった。

「私は…」

「元より、お前に断るという選択肢はなかった。」

「はいはい。知ってますよーだ」

レームへの移動船の中で彼女は俺の条件を受け入れ、俺と契約した。

断っていたら、彼女を国軍につきだしていたのだから当然の選択だ。

彼女はレームの街の中で尋ねてきた。

「それにしても、私の仕事ってこれだけなの？」

彼女には、俺の荷物を持ってもらっている。

まあ、めちやくちや運命をひっかきまわす俺に付いてくるというだけで、苦しい仕事になるだろう。

「俺はお前を奴隷や召使いとして雇ったわけじゃない。仲間に引き入れたただけだ。」

「…」

彼女は驚いたような表情で、俺の顔をのぞき込んだ。

俺が何だと聞くと「別に…」と、前世で死ぬほど聞いたセリフを口に出し、

「…仲間…か…」

と言って微笑んだ。

その笑顔に少しドキツとしてしまった。



「お前まで付いてこなくても良かった」

ユナンが出した迷宮の中で俺はレイに言った。

「いいじゃん別に。どうせ居ても居なくても変わらないよ」

そんなことはない、と言いたかったが、そんなことはないことはなかった。

結果として、俺は難なく迷宮の宝物庫までたどり着いた。

迷宮生物は思ったより弱く、仕掛けも簡単だった。

レイは役に立たないことはなかったものの、役に立つこともなかった。

ただ、俺がズンズン進んでいる中、迷宮内の不思議な動物や植物にわーとかきやーとか言っていただけだった。

この迷宮の中はアモンやザガンとは違い、普通のさびれた建物の中で敵と戦うという構造になっていた。

その建物はやはり西洋風で、どこかオシヤレな雰囲気を感じさせていた。

「我が名はバティン。時間と懇篤より生まれし精霊なり。」

宝物庫の中央にあった剣の星に触れると青い巨大な女性のジンが現れた。

長髪で、体中にタトゥーのような模様が入っていて、角が生えていた。

あと、胸が、大きかった。

レイはバティンを見て、腰を抜かしていた。

「バティン！……この迷宮はずいぶん簡単なんだな！」

青い巨人はにこつと笑った。

「それはあなたの腕がいいからですよ、乙彦。普通の人間だったら、私にたどり着く前に死んでいますよ」

「……………」

「王を選びましょう。私の王はあなたです、乙彦。」

バティンはノーシンキングで俺を選んだ。

「レイ。あなたも魔力は普通の人間より多いです。しかし、乙彦の方が、王の器としては優れていたのです。それにー……」

ちらりとバティンは俺の方を見た。

「あなたは乙彦の臣下のようにすしね」

「し、臣下って……」

まだ腰が抜けて、床に尻をつけているレイが言葉を放った。

しかし、まだ動揺と驚きでそれどころではないらしい。

「我が王乙彦よ、私の力を使い、王たるあなたの使命を果たすのですよ。」

「わかっている。」

「そう言うと思いました。私はあなたがここに来たときから、あなた

の冷静さ、勇敢さを見て、すぐにでもあなたを王の器として選びたい
と思っていました。」

「…フン、それは王の実力を測るジンとしては失格だな」

「ソロモン王には黙っていてくださいいね?」

そう言うと、バティンはにっこり笑った。

「出口はあそこです。期待していますよ、乙彦」

バティンは吸い込まれるように、シユルシユルと俺の剣に入っ
ていき、俺の刀の刀身の根本にはオクタグラムが刻まれた。

「…帰ろう、レイ。」

「う、うん、わかった。」

魔法陣が起動する間、レイはたくさん宝物庫の財宝を持っ
てきた。

魔法陣が起動すると、宇宙のような空間の中、レイと二人きり
になった。

「乙彦って、ホントにすごい人なんだね」

「え?」

「…今までは、偉そうな王子様っていうイメージだったけど、違
うみた
いだね」

俺は偉そうな王子様だったのか。

自らの傲慢な態度を反省する。

「あんなに大きいオバケみたいなのが出てきてもぜんぜん驚か
なかつ
たもんね。すごいよ。」

「すぐくはないだろ。確かにバティンは大きかったけど…」

迫力満点だったが、あまり時間がなく焦っているせい
か、リアク
ションは薄かったかもしれない。

「うん。…大きかったね…。」

「ああ。」

「…乙彦は大きいの好き？」

「えっ!!？」

驚いた。

レイの方を向くと、彼女は下を向いていた。

聞き間違いかもしれない。

いや、きつとそうだ。レイに限ってそういう話はしないだろう。まだあまり彼女のことを掴めないのだが。

「なに？」

レイが聞いてきた。

「…いや、何でもない。」

「…バーカ。」

レイが呟いたその一言は、乙彦は聞こえなかった。

第七話 『TIME』

「バティーン！」

彼がそう金属器に唱えると彼が消えた。

「…ユナン…。…こいつは使える。大当たりだ。」

後ろで声がした。

振り向くと、さきほど目の前にいたはずの彼は10メートルほど後ろにいた。

「ええっ!!?! どういうこと?!」

驚きの声をつい出してしまおう。

これがジンの金属器の力、伝説の奇跡なのか。

「瞬間移動…というわけではなさそうだね」

ユナンがフツとその口角を上げた。

その姿は喜びなどの感情の笑顔ではなく、今起こった事を信じられず、困った笑顔だった。

「これは魔力消費が激しい…。魔装を習得すればなんとかなるか…?」

「君は物知りだねオトヒコ、もしかして紅炎と仲が良かったりするのかな…?」

すると今度は乙彦が笑みを浮かべた。

それはどうかな?とでも言いたそうな、それでいて、その話はあまりしたくないというニュアンスが含まれているような、絶妙な苦笑だった。

「でも、それをモノにするのには時間がかかるよ。君にそんな時間があるの?」

乙彦は首を振った。

「ぜんぜんないね。だからいそがなくちゃ。中途半端でもいい。この力を最大限に活かせるモノにできればいい。」

「力を貸せてという顔だね。ふふふ、いいよオトヒコ。」

マゴイ?

マソー?

コーエンって練紅炎のこと？

私は知らないことを話している二人を見て、自分が蚊帳の外にいることを感じた。

感じ悪いね。

迷宮に入ってから驚きの連続で、（正確に言えば乙彦と出会ってからもしれない）信じられないことばかりだった。

この世とは思えない迷宮の死者の街。

剣の中から出てくる青い巨人。

財宝の山。

乙彦はずっと冷静で、財宝には目もくれず、ジンに夢中だった。

青いジンは女性のようだった。

女性的な特徴が：胸部がかなり女性的な感じに優れていた。

乙彦は大きい方が好みなのだろうか。

私もいつかあんな風になるのだろうか。

自分のネクロポリスな胸を手で撫でながら、自分の雇い主を気にし始めている自分に気づいた。

彼はいつも冷静で、なんでも知っていて、まるでこの世の全てを知っているようなオーラを漂わせている。

剣術が得意で、頼りになって、同じくらいの年齢とは思えない強さだ。

あの日、盗賊に置いていかれたことに気付いたとき、あの人は優しく声をかけてくれた。

傷ついた私を雇ってやると言ってくれた。

雇うといっても、彼の剣を持って一緒に行動するだけ。

私を救ってくれた彼にもっと尽くしたい、そんな気持ちとともに、彼をもっと知りたいという気持ちが成長していった。

彼は何を考えているのだろうか？

いつか彼と肩を並べて語り合える日は来るのだろうか？

そんなことを日々思っている私にとって、彼と同等くらいの知識を持ち、彼に信頼されていて（初対面だったらしいが）、彼と話し合っているユナンは、おもしろい存在ではなかった。

「…具合でも悪いのかい？・レイ」

気が付くとユナンが目の前に立っていて、私の顔をのぞき込むような素振りをしていた。

また、その向こうでは、苦しそうに肩で息をして倒れている乙彦がいた。

「い、いや、そんなことない、ですけど…」

乙彦に何があったのか心配になって彼の方に行こうとすると、

「…魔力切れだ。魔装なし、では、合計五回までしか、この、技を、使えなかった。」

苦しそうに彼は言った。

「ふうん。君はけっこう魔力がある方だね。」

涼しげにユナンは言った。

「とにかく、魔装だな、まずは」

自分にわからないことを言っている彼らを見るのは、やっぱりおもしろくない。



「はい、食事ができたよ」

その日の晩、乙彦は魔装の練習をし終え、ユナンの家でくつろいでいた。

「…あーご飯作るなら手伝ったのに！」

「よせよせ、この食事に手伝うことなんかないぞ」

レイの言葉を乙彦がさえぎる。

「どういうことだと戸惑っているレイの反応にユナンは、はははと笑った。」

「レイ、これは僕の魔法で作った料理なんだ」

「……！」

「空気中に無限に漂う世界の粒子を集めて、パンや野菜に再構築しているんだ」

「はあ……」

ユナンの魔法の腕は素晴らしいものだ。

ほかのどんな魔法使いでも使えないような魔法を楽々使える。

そんな彼にもう少し協力を仰ぎたいと俺は考えていた。

「ユナン」

「なんだい？」

「治癒魔法は使えるか？」

「ふふっ。それ、きくと思ってたよ」

「白雄・白蓮両殿下救出作戦。略して白作戦にしよう」

「略しすぎでしょ……」

「まだレイには言ってなかったな。では作戦の概要を説明しよう。」

「今秋頃、煌の白雄・白蓮両殿下が世界転覆を企む組織によって狙われているという情報が入った。」

我々はこれを阻止し、また、組織に気付かれないように両殿下を救う。

「……なんのために？」

レイが口を開いた。

「白雄・白蓮両殿下が失われることは、これから起こるであろう世界の

異変に対抗することによって、重大な損失であるからだ。」

「両殿下を助けたという実績で煌の重要なポストに就きたいんじゃないの?。」

今度はユナンが口を開いた。

こいつ、なかなか鋭い奴だ。

まさか、人の考えが読めるのではないだろうか。

紅玉のことまで知っているとすれば俺は死にたい…。

「それも考えているが、俺が目指すのは自身の幸福な生活や功名ではなく、世界を組織から守ることだ…。」

「だろうね」

「……………続けるぞ」

「まず、この組織の行動を一から止めることは不可能だ。

組織の力は邪悪で、規模はかなり大きい。

そこで、両殿下が死んだように見せかけ、救う。

これには俺の金属器、バティンの力を使う。

「…!?…バティンを使う?。」

「バティンの力は僕から説明しよう。君でもあまりわかっていないみたいだから、ね?オトヒコ」

ユナンがにやりと笑った。

「…オトヒコがバティンの力を使って、瞬間移動みたいなのをしたのを君も見ただろう?。」

「うん」

「あれは彼が瞬間移動したんじゃないやなくて、彼が移動したときに、時間を止めたんだ。」

「…!?時間を止めた!!?」

そうだ。俺がバティンの力を使ったとき、世界の時が止まったように、周りが静止し、俺だけが動くことができた。

しかし、止めていられるのは一回につき5秒ほど。しかも体力をかなり消費する。

「厳密に言えば、時間が止まったんじゃないやなくて、世界が彼の力でおさえつけられていたんだ。」

「…??」

「オトヒコが金属器を使ったとき、黒色の光を帯びていた。あれは力魔法の光。バティンの力は時間を操るんじゃないって力を操るんだ。」
「??」

「おそらく…、世界を力で抑え、また自分にかかる力を極限まで少なくすることで、時間の進みが限りなくゼロに近い中、動くことができるようになるんだ。彼の力でね。」

なるほど。そういうことか。

どうりで体力をかなり使うわけだ。

「おそらく、こんな大規模なジンの力なんだから、時間をおさえつけられるのは4、5秒ほど。」

「…」

レイはすでに頭がパンクしかけており、考えるのをやめている。

コイツ、こんな調子でこれから大丈夫かな？

「オトヒコ、君はこの力を両殿下を救うときに使う。だから治癒魔法がいるんだろう?」

「ああ。」

「…どういうこと?」

「考えてもみる。皇子を助けるタイミングは、彼らがある程度死にかけているときしかない」

「なぜ?」

「組織に今から襲われるって奴らを襲われる前に誘拐したなら、組織は彼らを探し出して殺そうとするだろう。当初の目的を遂行するために」

「確かに」

「組織の力は計り知れない。俺たちを見つけたし、皇子もろとも消えうとする恐れがある。」

「…」

「そこで、彼らが瀕死の状態で、俺が時間を止めている中助ければ、組織は彼らが死んだと思うだろう。また、時間を止めているのだから俺たちの存在も気付かれないだろう」

「…なるほど」

本当にわかっているのか？

まあ後々理解するだろうが。

「彼らはケガを負っているわけだから、安全な場所で治療する必要があるだろう？そこで、傷を癒すための治療魔法がいるんだ」

「…あく、なるほど」

「ちよつと強引かもしれないけどね」

「これしか手段はない。」

「ねえユナン、なんで乙彦は煌で暗殺事件が起こるなんて知ってるんだろう？」

作戦会議が終わった後、僕は彼らのベッドを作った。

オトヒコはよほど疲れたのかすぐに眠ってしまった。

その姿だけは年相応のものだ。

「…君は、主人が言っていることを信じられないの？レイ。」

「そうじゃないけど…ただ、何でかなって。」

確かに、オトヒコはまるで根拠があるのかわからないのかわからないことを言っている。

しかし、彼の実力や、王としての器の大きさ、彼の周りのまっすぐなルフからは、嘘をついているなんて思えない。

奇妙だ。

「さあ？僕にもわからない。」

「…彼は未来でも見えてるんじゃないかな？」
僕はオトヒコが怖い。

第八話 『BURN』

―煌帝国―

「兄上！」

彼は練白蓮。

煌帝国の第二皇子であり、俺がもつとも信頼する弟だ。

「紅炎が迷宮攻略に向かいました。今、出たところですよ。」

「そうか。」

ごく最近、世界中に現れ始めた迷宮。

我が従兄弟である紅炎は、頼もしいことにその攻略者であり、また

二つ目の攻略に向かっている。

迷宮の力はすさまじい。我が軍に必要な戦力だ。しかし…

ちらつくのはあの黒い組織。

彼らの手は借りるわけにはいかない。

絶対に。

しかし、そう言ってられない日が来るのかもしれない。

白徳大帝、父上が謀殺され、白雄の心は怒りと不安で揺れていた。



「練コーエンが迷宮に行ったって！」

「本当か？……じゃあ、今日だ。」

「長かったね……！」

レイがヘナヘナと床に座り込む。

そう、長かった。

ずっとこの日を待っていたのだ。

俺、倭乙彦が武器化魔装だけだが魔装を習得すると、俺たちは来るこの日のために大峽谷から焔に向かった。

マジの原作で、誰かが紅炎が迷宮攻略に行っていたときの出来事だったと言っていたような気がする。

そんな根拠をもとに、その日が来るのを焔で待っていたわけだ。

「考えてみれば今しかないよね、タイミングは。紅炎がない今は金属器使いが城に一人もいない。手薄だ。」

確かにそうだ。

白雄・白蓮は相当な武術の腕を持っているが、金属器は持っていない。

しかも、紅明や紅覇、白瑛、白龍、そして紅玉もまだ金属器を手にしていない。

ジュダルがまだ神官という役職ではないのだ。当たり前と言えば当たり前。

そんな兄弟の中自分は二つ目に手を出す紅炎は少し異常だ。

「今日で、この家ともお別れだね…」

レイがしみじみとつぶやいた。

そう、俺たちは今焔にいる。

来る今日のため、首都洛昌に家を借りたのだ。

金は俺が持っていたのがあるから良かったが、それでも借りれる家は限られてくる。

いつ来るかわからないこの日を、狭い家の中男二人、女一人で過ごし待ち続けてきた。

レイも精神的にくるものがあつたのかもしれない。

「…。まだお別れじゃないよ、レイ。」

「え!!?」

そうなのだ。

この家で、負傷した白雄・白蓮を治療し、組織から守る予定でいる。というより、それが一番の目的で家を借りたのだが。

「ここで治療魔法をするために、僕はここにいるんだ。僕だってイヤなんだよ?」

「あー…そうだったね…?」

レイはアホだから言ったことも覚えていないらしい。

「レイ、お前今日の作戦の流れは知ってるよな?」

「…!?!?…えー…もちろん!乙彦のマソーが鍵なんだよね!」

「そうだ。」

どうやら曖昧だが理解はしているらしい。

大ざっぱな人は今まで何人も見てきたから気になるほどじゃない。

ノリと勢いの国、鬼倭は彼女に合うかもしれない。

ドオンと、爆発音が耳を襲った。

時刻は夜、始まったのだ。

「オトヒコ!」

ユナンが俺に呼びかける。

俺もユナンも、準備は万端だ。

「ああ。行ってくる。」

今から十分間に合う。

待っている、白雄・白蓮。

「白作戦、開始だ!!」

―煌帝国城・本殿―

「…くっ…!」

燃え盛る炎。

周りには俺たちを見て襲いかかってきた煌の兵士たちの死体。
そして、組織の奴等のマトリョシカ。

何が起こったかを理解するには十分な判断材料だ。
組織が俺たちを消すために強行手段に出た。

「まだ…死ぬわけにはいかん…！奴らの思いどおりにはさせられん…！」

返り血と自分の血を振り払う。

ここから脱出しなければいけない。

道のりは遠い。

「兄上…姉上は…、母上は無事でしょうか…!?まさか今ごろ二人も…。早く助けに行つて差し上げねば…!?」

口を開いたのは三男の白龍。

白龍は知らないのだ。

この事態を引き起こしたのは一体誰なのか。

俺たちをハメた黒幕は誰なのか。

「……………急ごう。」

「はいー！」

「…!?」

まだ、真実を伝えるべきではない。そう思った。

せめて、俺たちが生きて脱出できる望みがまだあるなら…。

この国、いやこの家族に巣食う闇は、幼い白龍には荷が重すぎる。

まだ、生き残れる可能性はゼロではない。はずだ。

出口への道のりは、まだまだ長かった。



『聞こえる？オトヒコ』

「ああ。」

『今どこにいる？』

「今本殿に入ったところだ。異常はないが少し熱いな。」

もはや本殿は火がこれでもかと燃え盛り、兵士や将も近づけずいた。

白雄、白蓮、白龍はまだこの中にいる。

紅玉を始め、白瑛などの皇女や、その他皇子は避難できているらしい。

『両殿下は二階にいるみたいだ。彼らの他の魔力も感じる。気を付けてね。』

ユナンの魔法で、どこからでもユナンの声が聞こえるようになっていた。

ユナンは借りた部屋から状況を把握し、俺に指示を与えている。

「二階だな。すぐ行く。」

本殿の地図は、昔煌に来たときに見取り図をパクってきているので大体は頭に入っている。

当初の計画どおり、ユナンはそれを見て俺に指示を出すのだが、

「ユナン！炎の勢いが思ったより強い！急ぐぞ!!」

侵入者に気づいたように、炎はその勢いを増していた。

◆◆

熱い。

熱い。

熱い。

周りは炎に囲まれ、逃げ場はない。

あともう少しで出口なのだが。

白蓮は兵士に背中を斬られ倒れていた。

最愛の、最も信頼できた弟は死んだのだ。

そういう自分も、もう限界がきていた。

度重なる斬り傷と、尋常ではない火傷で、俺の体はもうボロボロになっっていた。

倒れそうになったのをなんとか肘で支えこらえる。

「…兄上っ!!」

まだ、傷は少ない白龍。

だが白龍も、この炎の中無傷で脱出するのは難しいだろう。
ハメラれた。

まんまと罠にかかってしまったのだ。

「……………無念だ……」

最後の、望みだ。

「俺と白蓮はここまでだ……。だが白龍、おまえは生きて俺たちの代わり和使命を果たせ……」

「…使命…」

「戦いぬくと誓え!!…我らの、この国の、仇敵を討て!!」

「すいませーん、無事ですか?」

「!!…兄上、助けが来ましたよ!!」

「…」

白雄は、火傷だらけの顔でその助けをにらみつける。

その表情は、彼の命の炎が消えようとしつつあることを感じさせていた。

「あの、事情はあとで説明するんで。白龍くん」

「…!?!」

「仇敵っていうのは練玉艶のことだ。」

「……………!!?そんな、そんなはずありません!!」

「…時間と懇篤の精霊よ、我が身に宿れ!バティン!」

時間が止まった。

剣に魔装を宿したこの能力は、5回までしか使えないものの、1回につき10秒時間を止めることができる。

しかし、全てもつてしても50秒。

時間は無駄にできない。

「…さっさと運ぶか」

俺は時間が止まって、何かを言いながら静止している白龍を左に抱え、倒れている白雄を右に抱えた。

「白蓮は…ダメか…」
間に合わなかった。

後悔の念を背負いながら、二人を背負い、階段を降りていく。
くそ、白雄はけっこう重いな。

しかも、熱い。

時間が動き出した。

気にしている時間はない。

ただ、走るだけだ。

「バティーン！」

二度目の発動。

鍛えてきた体を信じ、広い廊下を走る。

嬉しいことに、白雄たちは出口に近い階段の近くまで来ていたのだ。

何としても助ける。

「…バティーン！」

三度目の発動。

これだけで体力はかなり少なくなっていた。

炎の勢いが弱い出口の近くで白龍を降ろす。

しばしの別れだ。

走る。ただ走る。

やっと出口を出たのだ。

「……………バ、ティーン………」

四度目の発動。

発動できるのはあと1回だ。

人たかりができている大門を抜け、大通りに出る。
が、

「…バティーンッ!!!」

大通りに出る前に切れた。

これで五度目。

後はない。

息が苦しい。

走ってきたとき、火傷を負ったらしい。
痛い。

110秒経った。
しまった。

まだ家についていない。

このままでは、白雄もろとも殺される。
嫌だ。

もう一度、だけ……

「…バ、テイ、ン!!!」

目、鼻、傷口。

ありとあらゆる所から血が噴き出した。

血管があちこちで切れたような感覚に襲われる。

苦しい。

でも、走り続ける。

切れた。

泣きの六回目でも城から離れてない。

武器の魔装も解けた。

「……………バティン……………」

口からありえないほど血が出た。

もはや手足の感覚はなく、体中が焼けるように痛い。

視界はどんどん暗くなる。

家が見えた。

扉の前にはレイが立っている。

ここまでくれば、安心、だ。

そこから先の記憶はない。



「やあ、おはよう。」

気が付けば、ベッドの上で寝ていた。

体中が痛む。

無理をしすぎたか。

「……彼は……？」

消え入りそうな細かい声に自分でも驚いた。

自分はかなり弱っているらしい。

今でも、起きあがることができない。

「君よりは具合は良いよ。まだ目を覚まさないけど、大体のヤケドは僕の治癒魔法で治したからね」

「…ありがとう…ユナン…」

「どういたしまして、オトヒコ。」

今は、あの大火から一週間経ったらしい。

白雄も白蓮も死に、白龍だけが生き残ったがまだ目を覚まさない、と伝えられている。

皇帝には、白徳大帝の弟、練紅徳が就いた。

巷では死んだと思われている白雄はこの家で寝ている。

白蓮を助けられなかったことは悔やむに悔やみきれないが、白雄だけでも、組織の陰謀から救えて良かった。

「オトヒコ、じゃあ僕は大峡谷に戻るよ」

「ああ、今回は助かったよ。今度飯でも奢ろう。」

「ふふっ…そうだね」

ユナンは大峡谷に帰るらしい。

さて、俺もこれからどうしようか。

まずは魔力を使いすぎてボロボロのこの体を癒すことだが、それからは…。

「ねえ、オトヒコ」

「何だ？」

ユナンが扉に手をかけ、こちらに背を向け話しかけてきた。

「…君が、どんな人間なのか僕はあまりよくわからない。誰かに願いを託されたのか、自分の使命を果たすために行動しているのかとも、知らない。」

「…。」

「でも君は王の器だ。自分で選んでジンを手に入れた、そうだろうか？」

「ああ。」

「…君が、使命を果たすため自由に行動するのは、構わないよ。でも、君の民、君を王として慕う人たちのために、君は行動すべきだと思うんだ。」

「民…」

「それは多分鬼倭の人たちじゃないかもしれない。それが誰なのか僕にはわからないよ、でも…」

「！」

「一人はわかってるだろうか？」

ユナンが、寝ているレイを見て、言った。

「オトヒコ、君だけだ。君だけが彼女の王の器だ、だから…」

「彼女を幸せにしてあげてね。」

「！」

そう言うと、ユナンは家の外へ出ていった。

「…。」

俺がこの世界に生まれてきたのは、紅玉を幸せにするためだ。
でも、

でも、ずっと紅玉だけで生きていくわけにはいかない。

兄上、七海、ユナン、白雄、白龍、レイ……。

いろいろな人と関わった。

もう、紅玉だけを守る器ではないらしい。

俺は、

俺は…

「紅玉と、この世界を守る。」

【第二章】 王の器たちの計画と紅玉 第九話 『She』

ームスタシム王国ー

『王族、貴族を皆殺しにしろ!!』

『王女を見つけたぞ!!』

『捕らえろ!!!』

ムスタシム王国。

長年魔法の研究に国をあげて努めてきた魔導大国。

海を挟んでレーム帝国やバルテビアに、山脈を挟んで煌と、大国に囲まれた位置にあるこの国は、魔法の力で国の軍事さえも強化していた。

近年はその力で、軍事大国バルテビアの侵攻をも防ぎきるなど、魔法の力を全世界に示すきっかけになっていた。

ムスタシムの魔導研究の要は、世界一と言っても過言ではない、魔導研究施設にて学問機関、マグノシユタット学院。

学長のマタル・モガメット率いるこの魔導学院は、信じられないほどの魔法の力を、魔導士ではない人々に対して与えることで、ここ数十年で国内での権力は膨らみ上がり、大規模になっていた。

そんな世界一の魔法技術の恩恵は、病的なほどに人々に浸透し、平民をはじめ、貴族、王族にいたるまで、その力に依存していた。

彼らの真の狙いも知らずに。

魔法技術の奇跡を、貴族たちが自分たちの物だけにしようとする動きは自然な流れだった。

そんな彼らの魔導を支配しようとする動きが、国民の反感を買った。

病的な依存。

その先にあるのは破滅だった。

始めは国民の小さな反乱だったが、それがマグノシユタットの力で大規模なものになっていった。

国が保有している魔法に関しての全ての権利を学院に引き渡せと、反政府の彼らは要求した。

国が裂けるのは、時間の問題だった。

マグノシユタットの強靱な学徒たちは、反政府の民衆を扇動し、自分たちの保守に走った貴族や騎士団と手を組み、ついには国王を謀殺し、学院が国を支配しつつある。

学院の支配にある国内に、ムスタシムの王族を全員捕らえて殺せ、という学長直々の命令が出された。

次々と王族は処刑され、革命は大量の血を流しながら完遂した。

王族の生き残りも、すぐに発見された。

「…王女を捕らえたとか?…身柄を我々に渡せ。王族は城で首を晒さねばならん。」

国境近く。近衛騎士団の団長の前に、国民に取り押さえられた幼い少女が連れてこられていた。

その顔は何度も王宮で見た。

ドウニヤ・ムスタシム。

この国の前の国の王女だ。

「…近衛騎士団まで寝返っていたのか…っ!」

前王女の前でわめく傷だらけの大きな男は、イサアク。

彼女の忠実な騎士であり、今は…

学院に楯突く罪人だ。

「騎士団が…騎士団が主たる王家に剣を向けるなど、正気ですか!!?」

「…黙れイサアク…逆らえば貴様も容赦はせんぞ。ムスタシム王家は、もうこうなるしかないんだ。」

「…!?!」

ちらと周りの群衆を見やる。

国民たちは、幼い王女への同情などないばかりか、恨みや怒りの目線さえ向けていた。

魔導を独占した王家の罪は重い。

反対に、魔導の力から始まる、新しいこの国への希望は計り知れない。

そのためには、血を流さねばならない。

「見ろ。この積もった怨念を。」

「！」

「どうにもならん…。王族が、王族が死ぬしかないんだよ!!」

その騎士団長の声と共に、民衆の手が王女へと伸びる。

そこには、狂気さえ感じられる、ムスタシムへの恨み、魔法への依存からなる怒りがこもっていた。

イサクが彼女を掴む手を振り払う。

彼が彼女をかばう。

「おやめください!!…それは、あまりにも酷です!! 姫はまだ幼く、罪もない！」

罪はないかもしれない。

しかし血で始まった革命は、最後の一滴まで血を流しきらなければ成立しない。

王女を殺さねば革命は終わらない…。

「…なのになぜ…、なぜ死なねばならぬのですか!!?」

「なぜだど?…まあ、言うなれば…」

「これが、【運命】だからだよ!!」

「待てええええい!!」

騎士団長がイサクに狙いを定め、剣を振り上げたとき、群衆をかきわけ、素っ頓狂な大声がそれを制止した。

「!?…何だ、貴様は?」

声の主は、姫とそれほど歳が変わらないような少年だった。少し長めの黒髪をなびかせ、顔立ちは凜としている。

東洋風の服を着て、肩には大きな荷物を背負っていた。

腰には、身長と同じくらいの剣を帯びている。

「…野暮用でここに来た旅の者だ。その二人を殺すこと、この俺が許さん!」

何だお前、帰れ、と民衆から野次が飛ぶ。

少年はそれらを気にする素振りなど全くせず、じつと騎士団長を冷たく睨みつけていた。

そんな彼を奇妙に思ったのか、民衆や他の騎士はだんだんと後ずさりし、王女、イサク、少年と騎士団長を囲むような形になった。

「…フン。気でも狂っているのか!余所者が口出しをするな!!マグノシユタットに敵対する者は処罰する!命が惜しくばとっとと去れ!!」

「…マグノシユタット!」

少年が少し考えるような素振りを見せた。

まさか、騒ぎの内容も知らずに割り込んできたのだろうか。

騎士団長は、彼を本当に奇妙に思った。

「…なるほど、わかった。この二人をこちらに引き渡せばあなたたちの命は保証しよう。引き渡さねば強行手段に出るぞ?」

「なっ…!?わかってないじゃないか!!ふざけるなよ小僧!!」

騎士団長が剣を再び抜いた。

「…聞く耳持たず、か。」

「それはこっちの台詞だ!!」

「時間と懇篤の精霊よ、汝に命ず…」

少年は突然剣を鞘から少しだけ抜き、呪文を詠唱し始めた。

騎士団や民衆は呆気にとられ、ただ彼を見ながら立ち尽くすだけだった。

騎士団長も、首を傾げ剣を止めた。

「我が身に纏え、我が身に宿れ…、我が身を大いなる魔神と化せ…!! バティン!!」

鞘から抜かれた剣に刻まれた紋章から光が放たれ、徐々にその姿を変えていく。

剣は東洋の形から、その長さを変えずに、西洋風の刃が二つある剣の形に姿を変え、色は金属とは思えないほどの美しい黒に変わった。

見れば少年の両腕の肘から下も奇妙に姿を変え、タトウのような模様が走っていた。

「…チツ、まだできるのはここまでか。」

そんな事を呟く少年。

彼の姿に民衆は動揺していた。

騎士団長だけが、冷静に、彼の姿に心当たりを感じていた。

「貴様、金属器使いか…!!」

「そうだ。俺の名は倭乙彦！二人はもらっていく!! バティン!!」

一瞬、黒い光を彼の剣が発した。

顔を上げれば、もはやそこに彼と王女とイサクの姿はなく、逃げられたのだと騎士団長は悟った。

金属器…非魔導士（ゴイ）の力の象徴か…。

◇◆◇
「もう!! 本当に!! 何と、お礼を言ったらいいか…!!」

ムスタシムに面するアクティアの港。

そこで大男が大粒の涙をぼろぼろ流しながら土下座をして感謝を少年に伝えていた。

「いや、いいですよ。本当にそういうのいいんで。周りの人の注目具合がすごいんで。」

「…はっ!! すいません!!」

「…。ところで姫は?」

「ああ…、ドウニヤ様なら安心しきっているのか、ホラ。私の背中で寝てしまいましたよ。」

「そうか。」

見れば、乙彦とそう変わりない歳の姫が、すやすやと寝ていた。

あのとき、バティンの時間静止を駆使してあの場を脱出。

国境を越えた先では追っ手も来ないだろうと踏んで、アクティアへと二人（姫はイサアクにおぶられて）で走った。

「…これから、どうするんです? 姫を連れて。」

俺、乙彦はイサアクに問う。

彼はそこまで頭が回っていないような感じだった。

「…それは…えー…」

「…来るところがないなら、とりあえず俺と一緒に来ます?」

「え…!」

「傷だらけの姫を放っておけませんからね。」

「ありがとうございます…!!あなたは、私たちの命の恩人です…!!」

またイサアクはボロボロと涙を流した。

彼が涙もろいのか、それとも、それほど悲惨な状況だったのか、というのはいは考えなくてもない。

まあ、俺は国や危ない組織から狙われている奴らと行動していたのだから、二人が加わったところで、そう変わりはないだろう。

三人分の運賃を払い、移動船に乗った。

イサアクは俺の懐を心配そうにしていたが、俺が鬼倭の王子だと言うと、これまでにないほど驚きながら、納得してくれた。

一国の王子ならば、金属器を持っていても不思議でなく、懐も暖かくて問題ない…。

「…失礼ですが、行き先はどこへ?…その、乙彦様たちの拠点はどこにあるのですか?」

イサアクが聞いてきた。

船の個室を借り、ドウニヤ姫はベッドに寝かせてあるので、彼はずっと姫を背負っていた肩を気にしながら。

「…煌。煌に料亭を開いてそこで皆暮らしている。今日も、その関係でアクティアを訪れました。で、迷っていたらムスタシムのあの現場に偶然来ちゃって…。」

「煌?!料亭?!迷って偶然あの場所へ!!?」

イサアクは衝撃が思いのほか大きくて多かつたらしく、俺の言葉を復唱するように言っていた。

そんな彼の反応に、俺は思わず吹き出してしまった。

「!…笑わないでください!!…というより、本当に偶然ですか!?!」

「ハハハ…本当ですよ。」

「…偶然あの光景を見て、偶然助けようと思ったんですか!？」

あの場所に来たのは本当に偶然だった。

ムスタシムでの革命…マグノシユタツトのクーデターは、マギを愛する俺もいつ起こるか把握してなかったし、そもそも忘れていた。しかし得られたものは大きかったようだ。

たまには道に迷うのも悪くない。

「偶然迷って来ただけですけど、あんな悲しんでいた姫を見たら放っておけなくて。俺は困った人がいたら助けようって、ちよつと前から決めてたので。」

「…!!」

去年あった煌の大火の事件。

あそこで俺は自分の有利を考えすぎて行動して、結局白蓮を助けることができなかった。

俺はそれで、自分と紅玉のことだけ考えているのではダメだと気づいた。

自分は傲慢だった。

世界のため、紅玉のためになると思いこんで、助けられる命も助けられなかった。

その日から俺は改心し、本当に世界を救おうと考えたのだった。

罪滅ぼしではないが、偽善なのかもしれないが、困っている人を救おうと、決意した。

「…乙彦様。」

「？」

「素晴らしいあなたの志に、騎士イサク、…感服いたしました…!これからは、私の命が尽きるまで…、あなたのお力になりたい…!あなたを守る騎士として戦いたい!私は、」

「あー!!もう、お堅いのいいんで!!」

「え?」

イサクは、キョトンとした顔をしてきた。

「イサク、あなたはドウニヤ姫を守る騎士だ。彼女を守るのが使命だ、そうでしょう?」

「…。その通りです…。」

「なら、あなたが俺につくというのは、彼女まで俺の、世界の闇を相手にする勝負に巻き込むということだ！あなたはそんな中で姫を守れますか!？」

「命に代えても…！」

イサクは考える時間もなく頷いた。

その眼には固い決意と意志が宿っているようだ。

「…そうか。」

「…」

「だったら、お堅いのは抜きで仲良くやろうか、イサク？」

「……………!？」

イサクは一度また驚いたような表情を浮かべたが、今度は、微笑み、俺が差し出した手をしっかりと握った。

「…ああ!!」

俺がニカツと笑顔で返すと、イサクの目にはまた涙が入った。

こいつは本当に涙もろいのか？

しかし、これでまた仲間が増えた。

しかも、後々組織に迎え入れられる黒き王の器を、白きまま守ることができた。

運命…：そんなのがあるかはわからない。

あるのかわからないものを憎むのはアホらしい。

ドウニヤ…。

彼女が命を狙われるのは運命だと、あの男は言った。

なら…

「なら、俺が君を助けたのも運命だ…!!」

朝になった。

俺は日の光を浴びるために部屋を出て甲板にあがった。

揺れる船の中、寝ぼけたままだとすぐに気持ちが悪くなる。気分は最悪だ。

「おはようございます、乙彦。」

イサアクが甲板に出ていた。

彼の傷は、俺が昨日手当てをしたが、よくなっているようだった。

「…おはよう。」

「姫はまだ寝てるでしょう?…最近、あまり眠れてなかったんですよ…。」

「だろうな…。」

「そういうえば聞きたかったのですが、アクティアへ行つた野暮用つていうのは?。」

イサアクが聞いてくる。

「…塩。」

「アクティアまで直々に来て!?乙彦…。」

彼は驚いているようだった。仮にも一国の王子が買い物に遠征しているのだ。

驚いて当然。

「ウチの料亭は結構人気があつてな…。塩にもこだわりたいんだ…。」
実際そうだ。

去年から開いている店だが、俺の前世の記憶を活かし、新しい料亭の形、料理で洛昌中の人々に大人気だ。

「…気になつていたんですが、なぜあなたが料亭をやっているんです?しかも、煌はスパイ対策で、外国人は店を持つどころか、住むのも難しいって聞いたんですが…。」

その通りだ。

煌は軍事大国らしく、警備が厳しい。

第十話 『HOME』

「兄上、お話があります。」

「……。お前、急に帰ってきたかと思えば……。」

俺は煌の大火の事件で傷ついた身体を癒した後に、鬼倭王国へと戻った。

煌での家は大家になんとか適当に言っ借りたものだが、もう借りるのは限界が来ていた。

煌ではスパイ対策に、煌の民以外の入国、居住を制限しており、身分がはっきりしない者は暮らすことができない。

そんな中、あの大火の一件が起こり、しかもそれを敗残兵の仕業だとしたせいで、国内の警備はかなり嚴重になってしまった。

鬼倭人である俺は東洋系の顔付きをしているし、白雄は煌出身だから良いのだが、レイはアクティアの生まれで、金髪だ。

なんとかやり過ごすのも難しくなり、俺の回復を期に、とりあえず鬼倭に三人で行くことにしたのだ。

これからのことだが、粗方目処はついている。

まず、白雄だが、俺たちと行動をすることになった。

傷が癒えて、意識が戻ってすぐの頃こそ、『玉艶を殺す』とか『紅徳にこの国を任せられない』とかと騒いでいたが、俺の説得で、どうにか落ち着いてくれた。

今、煌の王宮に戻るのはあまりに危険だ。

死んだことにはなっているものの、死体はもちろんだが見つかったおらず、玉艶や組織は誰かに助けられたと踏んでいても不思議はない。

助けた人物が俺ということにも、もしかしたら気付いているのかもしれない。

そんな状況から、白雄は俺たちと行動を共にすることを決めた。

白雄も俺も組織にとつては邪魔者だろうから、お互いを守るという約束もした。

そうなつてくると、問題は身の振り方である。
なんとか組織から白雄を匿いつつ、組織、ないしは焯の内部に近づき、組織の野望を阻止する。そして紅玉を守る。
そのためには――…。

「…焯に仕える?」

「そうです兄上。焯の内部、そしてその奥に潜む組織の闇に触れるには、焯の一将軍になるのが一番。」

兄上、鬼倭王国の次期国王である倭健彦に世界中で暗躍する組織のこと、そして俺が彼らから世界（と紅玉）を守りたいという意志を明かした。

兄上も世界の異変には気付いていたようで、俺の意志には同調してくれた。

「しかし、わかっているだろうが、お主は鬼倭の王子。そう簡単に出す訳にはいかないし、焯もすぐに受け入れるとは思えんぜよ…。」

「…焯の偉い方、いや、練紅炎には認めてもらえるネタ元ならあります。」

「…それはお主が連れてきた、火傷の大男のことか?」

……しまった。気付いていたか。

白雄が生きているということは、いつでも組織から狙われる可能性がある以上、知る人は少ない方が良い。

兄上まで巻き込んでしまうのは、情けないことだ。

「…まあ、あの男が何者かはワシは知らんが、奴がネタだということはわかったぜよ。」

「兄上…。」

きっと白雄を兄上は知っているし、この大火の後、金属器使いが焯から連れてきた、火傷だらけの男…。

兄上が知らないはずはない、気を遣わせてしまったのだ。

「お主が欲しいのは、焯帝国軍につく、表向きの理由、というわけだな?」

「はい……！」

「……、わかった。少し父上と相談してこよう。」

……やった！

まずは、何とかなりそうだ。

兄上にはもう感謝してもしきれない。

屋敷の兄上の部屋の畳の上で、俺は深く頭を下げた。

「……それにしても乙彦。お主は大きくなったのお！」

「？……はあ……。」

「ちよつと前までは、小さい体でいつも勉強や稽古ばかりして、鬼倭の男としてどうなのかと思っておったが……」

「……」

「……急に迷宮を攻略したいと言って旅に出て、そしたら金属器と仲間と一緒に帰ってきて、世界を救うと言いだしおって……」

「……」

「ワシの知らん間に、お主は大きい男になったぜよ……！」

「兄上……！」

そう言うと、健彦は俺の肩をポンと叩いて部屋を出ていった。

思えば、健彦には迷惑をかけてしまったのかもしれない。

いつも俺のワガママを許し、この国を任せたなんて、無責任な事を言っても、笑って受け入れてくれた。

前世の記憶があったから、何となく彼に信頼できず、やりにくいこともあった。

しかし、やはり兄弟なのだ。

前世の記憶があろうとなかろうと……。

◆◆
―煌帝国・洛昌―

「お久しぶりです。乙彦殿。」

洛昌の中心に位置する、本殿。

一部は大火で焼けてしまったが、迅速な消火と対応で全焼はまぬが
れ、今となつては完全に復旧している。

そんな本殿の、応接間。

俺は煌の未来を担う二人の人物と会っていた。

「お久しぶりです。紅明様、紅炎様。」

「フン…。」

この偉そうな態度を取っているのが、練紅炎。

二つのジンを宿しているが、まだ若い。次期皇帝に最も近い人物
だ。

「紅徳帝への面会は来週ですが…私たちにお話とは？」

彼は練紅明。

煌の第二皇子で、非常に頭が切れる。

実際、まだ彼は16歳くらいだが、数々の戦をその頭脳で作り上げ
た戦術や戦略で切り抜けたという。

ぜひとも味方に引き入れたい。

「…先日の大火の一件は、残念でしたね。」

「その話か。…それは聞き飽きている。」

紅炎。

先の大火の事件は彼が迷宮に行っている間に起きたこと。

彼の後悔の念は想像できるくらいだ。

しかし、白雄は生きている。

それを伝えなければ。しかし、

「…自分も、両殿下には小さい頃から良くしてもらっていたので、今回の件は…許せませんね。」

「…、そうですか…。」

紅明が反応した。

言葉はかなり選んだが、組織についての情報をお互い知っていると
いうことは示せたか。

既に組織は煌の内部にいる。

どこでこの会話が聞かれているかもわからないから、組織についてはつきり話すことはできない。

安全策をとるのだ。

「今回の件を受けまして、鬼倭としても動こうという話になったので
す。これは紅徳皇帝に見せる書簡です。」

「拝見します。」

書簡を紅明に渡す。

紅炎は椅子に座って興味なさそうにしている。

本当に興味がないのか？

「…乙彦殿、これは…？」

「ええ、鬼倭と煌は同盟を締結することになったんです。」

――

『…同盟!？』

『そうぜよ。ずっと前から話があっただが、何かきつかけがなくて
困っていたところだったぜよ。』

『…俺に煌の皇帝を説得しろ、ってことですか？』

『それは違うぜよ、乙彦。お主にやってもらうのは…』

――

「…同盟の補償として、あなたが煌帝国軍に？」

「はい。」

同盟の代償として、焯の傘下に下る。

鬼倭としては金属器使いの乙彦を失うのは損害ではあるが、強大な軍事力を持った焯を味方につけることのメリットは大きい。

同時に乙彦が焯の内部に入ることができると、どの勢力にも利益になる。

「焯と鬼倭で軍事的な協力関係を作り、その代わりに金属器使いであるあなたを…。えっ!!?金属器使い!?!」

「はい。でもあなたたちの敵じゃないですよ。」

この言葉が意味するのは一つ…組織に力を借りて迷宮を攻略したのではないということ。

金属器使いは軍隊一つに匹敵するほどの力を持つ。

軍事大国焯は、その力を欲しがるだろう。

「…!!」

「…フン。俺を味方につけて父上との同盟締結を有利に進めたいのかわらんが、俺はお前が信用ならん。乙彦。」

「…紅炎様…。」

やはり、この程度で話を聞く男ではなかったか…。

だが良い。

これくらいの条件で手を組むくらいの甘い男なら、ここで手を切っていた。

ここまでは計画通りだ。

「まあまあ、兄王様…。」

「…わかりました。また来ます。今日はありがとうございました。」

俺は紅炎に手を伸ばす。

紅炎も俺の手を取り、握手をした。

ここまでは計画通りだ。

俺は、二人に一礼をしてから、その場を去った。



『第一級特異点の一人が、我らの国と手を組もうとしていますねえ。』

『シンドバッドですか?』

『いいえ。もう一人の方です。』

『倭乙彦…。邪魔ですね。』

『しかし、うまくいけば彼をこちら側に引き込めるかもしれません。』

『そうですね。』

『そうですね。』

『我らはこの世を暗黒に染めるのみ。』

『』『我らが父の作られし、真なる民の共同体。』『』『』

『』『アル・サーメンの、アジエンダのままに。』『』『』



しかしながら、この屋敷にももう組織の連中が大勢いるとは。

彼らの規模と行動力は、桁違いだな。

そういえば、白龍は俺のことを覚えているのだろうか。

もしそうだとしたら、そこら中にいる組織の奴らに、白雄の安否と俺が匿っていることがバレて、一発KOだな。

万が一に備えて、彼と会ったとき、どうするかを考えておいた方がいいな。

「きやつ!!」

「おつと!」

そんな事を考えながら歩いていたら、人とぶつかってしまった。

いかんいかん。俺とすることが。

これだから歩きスマホはいかんのだ。

「これは失礼。お嬢さん、大丈夫ですか?」

「え……ええ、へいき、です。」

俺とぶつかった女の子は、パタンと後ろに倒れてしまっていたが、けがはないようで、スツと立っては、着物のホコリを払うような仕草を見せた。

その女の子は、背が俺の半分くらいで、豪華な服を着ていて、髪が赤かった。

まあ、ここは煌の城なのだから、小さい女の子がいるならそれは貴族の娘か皇女な訳だが…。

………。皇女?

「…し、失礼ですが、あなた、お名前は…?」

赤く長い髪。

その髪型には見覚えがあった。

二本のおさげをなびかせ、サイドの髪を上でまとめていた。まるで、天女のような…。

「…私（わたくし）は、煌帝国第八皇女、練紅玉…です。」

練紅玉。

探し求めていた俺の、姫だった。

第十一話『RED』

―乙彦が紅玉と初めて出会った日の夜―

「…まったく、彼には驚かされますね。」

練紅明は頭を掻きながらため息まじりにつぶやいた。
今日訪ねてきた倭乙彦。

彼とは、彼が幼い（今でも十分幼いが）頃からの付き合いである。
昔から、年齢の割にとっても頭が切れて、武術の腕もかなりのもの
だった。しかし…

「まさか彼も兄王様と同じ、迷宮攻略者だったとは。」

「ああ…。」

紅明の兄である練紅炎。

彼も乙彦と同じ迷宮攻略者であり、宿すジンは2体。

「乙彦殿も、彼らに選ばれ招かれたのでしうかね？」

「…いや、どうだろうな。奴は自分の本心を語る気はないらしい。」

「…。我らの敵でないといいのですが…。」

「フン。奴は敵ではないとぬかしていたがな。」

先日の大火の一件から、焯内部に湧くようにその姿を見せるように
なった【組織】。

彼らの活動は今になって始まった訳ではなく、焯帝国建国直後から
ちらほらとその片鱗を見せていた。

練紅炎も、【組織】の力を借りて迷宮に挑んだのだが、【組織】は紅
炎たちにとっては少なくとも味方ではない。

彼らはこの国の内部を操ろうとしている。

先日の大火の事件も、【組織】が糸を引いていたのだと踏んでいた。
「しかし、その彼を焯の軍に入れて同盟を結ぶとは…。ほかの狙いが
あると言っているような物ですね。」

「…。」

「考えたくないですが、おそらくスパイでしょうね。鬼倭はシンド
バッドとつながっているなんて噂もあります。」

「シンドバッド…、確かに奴なら焔の情報が欲しいかもな。」

後に七海の霸王とも呼ばれる王の器、シンドバッド。

彼は迷宮を攻略し、商人として世界を回っている。

彼が多くの国と同盟を結び、さらには最近自分の国を作ったというのはかねてから紅炎たちの耳に入っていた。

「…すると辻褄があいますね。皇帝にもこれを伝えて、同盟を取り消しましょうか?」

しかし、こんな見え過ぎた行動、彼がするのだろうか?

こんな国家どうしの取り決め事で、わざわざスパイですと言ってくるようなことをネタに持つてくる意味はあると思えない。

「なにか他の目的があるのでしょうか…。どう思います? 兄王様。」

「……………」

「兄王様?」

見れば、練紅炎は小さいメモのような紙をじっと睨んでいた。

紙をチラツと見やると、そこにはたくさんの数字が不規則に並んでいて、文章というようなものではなかった。

「…そういうことか…。」

「兄王様…?」

「紅明! 悪いが明日俺は出かける。軍議にも出んと伝えておけ。」

「承知しました。どこへ出かけられるのですか?」

紅炎はすつと椅子から立ち上がった。

「…外出の事は機密事項だ。誰にも教えるな。よいな?…心配するな、少しアホと会つてくるだけだ。」

そう言うと、紅炎は部屋を出ていった。

機密事項ということは、大体お忍びで街に繰り出すことなのだろうが、紅炎はそういったことは全くしない。

彼は街へ行くときは堂々と行くからだ。

何かと不思議なことが多い紅炎のことなので、特に気にすることではないか。

そう思い、紅明も自分の部屋へと帰っていった。

◇◆◇
―次の日―

「…連れが先に来ているのだが。」

「はい。どうぞこちらへ。」

洛昌の大通りからは少し外れた古びた料亭。

ここにやってきたのは、鎧を脱ぎ、町人に変装した練紅炎であった。

「…！、来てくれたんですね！」

「…フン。…早く済ませろ。」

そうやって、紅炎はどかっと座敷に座る。

店員に案内された個室には、二人の先客が対面に入っていた。

一人は倭乙彦。

つい最近煌に来た鬼倭の第二王子である。

もう一人は、仮面をつけている大男。

「ここは俺が知る限りでは煌で一番安全なところなんですよ。他の客や店員には盗み聞きされることはないです。」

「…。尾行はまいてきてある。さっさと本題に入れ。」

「そうですか。…俺はあなたに会わせたい人がいるんです。」

紅炎がじつと乙彦の隣に座る仮面の男を睨む。

身長は180くらいで、体格はがっちりしているが締まっている。髪は青がかった黒で、肌のいたる所に火傷のような跡が見えた。火傷…。

「…そうです。この人こそ、先の大火で死んだと思われている、練白雄です。」

「……っ!!?!…白雄様だ?!」

「はい。」

紅炎はまさか、信じられないという驚きをその表情に浮かべた。そう、練白雄は先の大火で死んだのだ。

「紅炎…この顔を見ても信じないか?」

大男が顔を隠していた仮面を外す。

そこに現れたのは、火傷の跡と傷だらけで、しかし凛々しさを備えた顔。

その顔を紅炎は忘れるはずがなかった。

ふいに、紅炎は自分の目頭が熱くなったことに気付いた。

「…白雄様…。…(無事で…)」

「礼を言うぞ、紅炎。俺と白蓮、そして白徳大帝が亡くなってから今まで、よくがんばってくれた。」

「…いえ…そんな…俺は…!」

「あの大火の時、この乙彦殿が金属器の力を用いて、俺と白龍を救ったんだ。」

白雄が言う。

すっかり落ち着いた紅炎は不思議な顔をした。

「俺の金属器は時間を止めるようなことができますよ。時間を止めて、敵に見つからず、最速の時間で二人を安全な所まで運んだんです。」

「…時間を止める…!？」

「その結果、俺は一命を取り留めたわけだ。白龍も無事だと聞いている。」

「はい…。」

「お前に伝えたいことがある。紅炎。」

白雄がじつと紅炎を見つめる。

「…まず、組織のことについてだ。お前も感じてはいるだろうが…。」
「煌の帝国化前後から姿を現しだした闇の組織…。白徳様も、白蓮様も彼らによって殺された…。」

「そうだ。そしてその組織を率いているのが、練玉艶だ。」

紅炎はうつむく。

「…気付いていたようだな。しかし、奴らをどうするかはお前に任せる。」

「…!」

「お前と紅明のことだ。利用することを考えているだろうか？」

紅炎は腹の内を見透かされたように感じて、笑みを浮かべた。

白雄はそれを見てうなずいた。

「紅炎、お前に頼みがある。」

「何ですか?」

「この国を、それと弟たちのことを頼む。」

「……!？」

「世界を一つにするんだ。俺や白蓮や父上もできなかつたこの夢、お前にしか成し遂げれない。」

「…っ!!しかし!白雄様!!」

「?」

「組織に命を狙われて、王宮に今戻れないことはわかります!しかし、あなたは煌の皇子です!!戻ってはこられないのですか!？」

紅炎は必死に、嘆願するようにその思いをぶつけた。

紅炎にとって白雄とは、尊敬する人物であり、目標であり、仲間であり、家族であり、救えなかった人なのだ。

「紅炎…。」

「練白雄は、死んだ。もう、これからはお前が煌を支えていくのだ。戦のない世の中を作れ、練紅炎…。」

紅炎は、その涙を落としていた。

白雄が彼の肩を力強く掴んだ。

煌の未来を任されたのは、18歳の少年なのだ。



「紅炎に会わせてくれてありがとう、乙彦殿。」

「いや、白雄さんの頼みならいいんですけど、良かったんですか？あれだけで。」

紅炎と店で別れ、洛昌内にとってある宿に向かう道の途中。

白雄は仮面をつけながら言った。

「ああ。紅徳でも俺でも紅明でもない、紅炎がこの国を仕切る。それだけ伝えておきたかった。」

「そうなんですか…。」

「それにしても、紅炎をどうやって呼び出したのだ？」

「…それはこれですよ。」

俺は小さな一切れの紙を差し出した。

そこには、〃11271230〃と書かれている。

「何だこれは？」

「1番街127番地、12時30分。…あの店の住所と待ち合わせの時刻。城ではどこで聞き耳たてられているかわからないので、これを握手するときに渡しました。」

「なるほどな」

「…これで、紅炎サマが煌滞在を許してくれればいいんですけど。」

「……。」

白雄が道で立ち止まった。

「白雄さん？」

「乙彦殿。あなたの、世界の異変を止めたい、という願いは俺も共感した。あなたは先見の明があるようだ。命を救われたあなたに仕えたいと思った。」

「…はい。」

「しかし、あなたにはほかの目的があるように思える。強引に煌に入らなくても、他の道だってあるはずだ。」

「……。」

「あなたの本当の目的を、聞かせてくれないだろうか。でなければ、忠誠を示すことなど不可能。あなたもそれはわかるはずだ。」

「……！」

見透かされていた。別の目的、紅玉を。

このことを話さなければ、彼は俺を信用しないだろう。

しかし…

「……練紅玉。」

「え?」

「俺は彼女を救うためにこの世界に生まれてきました。」

呆然、という表情を浮かべる白雄。

信用を得るため白状しようかと思っただが、余計に怪しまれているのかも。

まずい。

「俺はある事情があつて、その練紅玉が悲しい目に遭う未来を知ったんです。俺はそれを止めたい。」

嘘は言っていない。

しかし、これを白雄は信じるのか。

「紅玉、というと?」

「今の第八皇女です。今は6歳。」

「あなたはその紅玉と結婚したいと?」

「いいえ。しかし、彼女の幸せが俺の願いです。」

言っていたらバカらしくなってきた。

そうだ。俺はバカらしい理由で転生してきたのだった。

白雄はしばらく考えるような素振りをしていたが、ニコと笑って言った。

「…乙彦殿、あなたはどうかやら俺の想像を超える変人のようだ。」

「うっ!」

変人。確かに。

紅玉への思いは時空を超えるほどなので変態のレベルかもしれない。

「しかしあなたのその真っ直ぐな目…嘘を言っているとは思えない。」

「…言ってますんし!」

「この練白雄、あなたのその不思議な魅力に惹かれました…。ぜひ、お供させていただきたい。」

「も、もちろん！」

俺は白雄の手をしつかり握って言った。

少々バカにされているような気もするが、これで本当に白雄を味方につけたのだ。

なかなか順調だ。

「それで、その紅玉殿とは会ったことは？」

「昨夜に初めて。」

「え！そうなのか！…どうでした？思いを伝えられました？」

「いや…。」

「？」

「緊張して、一言もしやべれませんでした…。」

昨夜、紅玉と会ったとき。

まさかエンカウトするとは思わなかったのだ。

緊張してなにも言えず、会釈だけして足早に去った。

紅玉はおかつぱで、小さくて、すごく可愛らしかった。

心臓はバクバクだった。

この話をして、散々白雄に笑われたのは言うまでもない。

第十二話 『さよなら傷だらけの日々よ』

「…それで信頼を得たのかはわからないけど、正式に鬼倭は同盟を組むことになって、俺も晴れて煌に滞在できることになったんだ。」

「へえ…じゃああなたは煌の将軍になったというわけですね？」

「いや…ちよつと違うんだ。」

「え？」

「…イサアク…」

アクティアから出る移動船。

甲板ですつと話していた乙彦とイサアクの後ろに、小さな少女がいつの間にか立っていた。

「あ！姫様お目覚めでしたか。おはようございます。」

「…おはようイサアク。」

この少女はドウニヤ・ムスタシム。

ムスタシム王国の王女なのだが、先日のマグノシユタツトのクーデターで命を狙われ、護衛のイサアク共々逃げていたところを乙彦が助けたのだ。

「おはよう、姫。よく眠れました？」

「あなたは乙彦様でしたね。ええ、信じられないくらいぐっすり眠れましたわ。」

「そうか。」

「昨日はあなたに助けていただいて、本当に感謝しています。ありがとうございます。」

「いや、いいですよ、お礼なんて。」

「いいえそんな、命の恩人ですから。」

ドウニヤが乙彦の手をとり、上目遣いで言った。

まだ幼く、体にはあちこち傷が見受けられるが、姫は姫。

その気品と年齢に合わない色気を兼ね備えた仕草に、女性免疫が少ない乙彦の心臓が跳ねた。

緑がかつた髪、青い眼、白い肌、その全てが乙彦を引きつけた。

(いかん、こういうときは紅玉のことを考えろ…。)

「どうかされました?」

「いや…。」

さらにドウニヤが乙彦に近づいてきた。

自分は女の子に弱い、と認めざるをえなかった。

早く、この状況を打開しなければ…!

「乙彦! 乗り換えですよ。」

「…: ああ、行こう。」

正直、助かったと思った。



「先ほど、あなたのこと、これからのことをイサクから聞きましたわ。」

乗り換えた船の個室内。

今はバルバッドから煌へ船は向かっている。

「私たちをあなたの側に置いてくださるなんて、どうお礼を申し上げたら良いか…。」

「…。」

側に置くって約束したかな?

疑問に思ったが、まあ良いだろうと気にしないことにした。

「それで、気になっていたんですけど、煌の將軍じゃないってどういうことですか? あと、料亭つてのは?」

今度はイサクが質問をしてきた。

この顔、どこかのプロ野球チームで見たことがあるような気がするが、思い出せない。

こんなことは関係ないのだが。

「俺は、煌で同盟を結んだときに、紅炎に色々と条件を出されたんだ。」

兄弟の命を救った恩があるはずなのだが、紅炎は俺に対する接し方を変えなかった。

しかも、交渉に条件を加えてくる強引き。

それが、練紅炎という男なのだ。

「条件というと？」

「…俺が紅玉姫を守ることを目的に煌に入ろうとしていることは言っただよな？」

「はい。なんだか笑えましたが。」

やはり、紅玉のことを隠しているというのでは、話がややこしくなると思っ、あの紅炎と話した日以降は、信頼できる人間には真の目的を言うことにした。

レイは驚いていた。

紅炎は「やはりお前は狂気に満ちていて愉快だ」と笑った。

紅明はさらに俺を怪しむようになった。

まだ白雄含め、煌では四人しか話していないこの話は、すでにイサクとドウニヤにはしていた。

「俺が紅玉姫の護衛に就きたいと下手に出たのを良いことに、紅玉の護衛に就くにはと、言ってきたわけだ。」

「はあ…。」

ピツと乙彦は人差し指を立てる。

「まず煌帝国軍の兵士ではなく、紅炎直属の部下になれと言ってきた。まあ、呑むしかないのだが。」

「…。」

「あと、練家に忠誠を示さなければ紅玉の護衛には就かせないと言われた。」

「ち、忠誠?!…あなたは鬼倭の王子なのでしよう!?!」

イサクが驚いて身を乗り出した。

確かに、俺は鬼倭の王子なのだが、その前に、紅玉と世界を守ると誓った転生者なのだ。

鬼倭のことは気にかけていないとまではいかないが、兄に任せてお

ける安心がある。

目的のためには練家に忠誠を示すくらいどうってことないのだ。

「…まあ、そんな難しいことでもなければ、王子としての誇りを捨てることでもないんだけどな。」

「とうとうっ。」

「紅炎の下で働いて功績を残すことと、会議で奴らとは違う立場見方から意見を言うこと…あと、練家の皇女と結婚することとか…。」

「結構難しそうなものもあるじゃないっすか!!しかも、結婚って!？」

「…ああ、それは、何とか断ったんだけど…。」

練家の男は横暴で滅茶苦茶なのだ。

下手に出たと思ったら色々注文をつけてくる。

結婚の話も、俺に知らせる前に準備をしていて、皇女様が挨拶にきたときは本当に驚いた。

なんとか年齢や立場の危うさをネタに頼み込んで断ったはいいが、相手になる予定だった皇女様はひどく落ち込んでいた。

アリババ君にもこんなことを言っていたわけだから、彼らは元から本当に滅茶苦茶だったのだ。

「…まあ、そんな訳で、俺は將軍になるわけでも紅玉の護衛になるわけでもなく、最近是国内の内紛をおさめたり、警備をしたりしていたんだ。」

「そうなんですか…。」

「じゃあ、料亭っていうのは何ですか?」

「…前に話した、俺が助けた練白雄とレイ。そいつらが暇だっていうんで、二人にも働いてもらうことにしたんですよ。」

俺が紅炎の下に付くとき、住むところとして洛昌にある家に（頼み込んで）住まわせてもらうことになったのだが、白雄とレイが俺が働いている間、何もできないから暇だと言いつ出したのだ。

暇とは何だということだが、白雄は組織に追われている身、無闇に外に出せない。

そこで、住んでいる家を改良して、一部を料亭として建て替えたのだ。

これが最初こそ全然儲からなかったのだが、俺の前世の記憶を生かすことで急成長した。

朝にはモーニング、お茶を頼むと軽食が出るサービスを設置。

昼はランチとして特別日替わりメニューを出し、夜にはオシヤレなバーになる。

また、煌の人々の舌に合いそうな中華料理を主に扱い、テイクアウトもできる。

今では朝早い煌の兵士や、ちよつと身分の高い方々が訪れるほか、知り合いである皇子や皇女も足を運ぶ場所になっている。

「二人にも、しばらく料亭で働いてもらおうで。」

「え!!?」

「だって、行くところないんだろ?」

「それはそうですが…。」

チラツとイサクがドウニヤを見ると、ドウニヤは下を見てうつむいていた。

「…?」



「いらっしやいませ…って今日は休業日なんですけど?」

「今戻ったぞ、レイ。」

「なんだ、乙彦だったのか……ん？そちらは？」

「…新しい従業員。」

何日かかったのかわからないくらいの船での移動を終え、俺はドウニヤたちを連れ、煌に戻った。

レイに彼らを紹介すると、「乙彦って王族助けるのが趣味なの？」と言われた。

仕方ない。道に迷ったら偶然王族が襲われていたのだから。

「紅炎様から戻り次第王宮に顔を出せて手紙が来てたよ？」

「わかった。今日は遅いから明日行こう。」

紅炎にお暇をもらっての旅行だったのだが、いつ帰るかとかは明確に知らせていなかった。

それでも紅炎が許したのは彼の大きっぱな性格からなのか、今の煌の状態からなのか…。

マジ本編が始まるまであと約9年だが、煌帝国はやっと争いばかりだった三国を平定したばかりで、他国への侵略戦争とかは始まっていなかった。

もちろん、各国への諜報活動や、近隣国、村への「煌の傘下に下れ」という通達をする活動はしているらしいが。

「明日から、また色々始めることにしよう。二人も、今日は寝てくれ。」

「えっ…あ、はい！ありがとうございます！」

「…どうも。」

「二階に空き部屋があります。お布団もありますから。案内しますね、こちらへどうぞ。」

「レイは敬語がうまくなったな。それだけでも、店を開いて良かったというものだ！」

「うるさい乙彦！」

レイはそう言うと、二人を連れて二階へと上がっていった。

気が付けば、後ろのカウンターに白雄がいた。

「お帰りなさい、乙彦殿。」

「ああ。」

「…彼らも紅玉姫を守るために必要な人材なのか？」
「まさか。助けたいと思ったから連れてきたただけだ。ただ、労働力として役立つ人材かもな。」
「…。」

白雄はにっこり笑っていた。

―夜―

「…?」

何だか寝付けなくて、水でも飲もうと一階に下りようとする、一階に明かりがついていた。

消し忘れだろうか。いやまさか。

「…！…眠れませんか？」

「…乙彦様…。」

一階でドウニヤが窓から外を眺めながらイスに座っていた。

月に照らされて、緑の長髪がまた美しく輝いていた。

「月がきれいですね。」

「…ええ。本当に。」

「でも姫様の方がきれいですよ？」

「…。」

しまった。

余計なことを言ったか。

調子に乗って言ってみた台詞だが、結構恥ずかしいものだ。

俺が何を言おうか考えていると、

「…私、ずっと考えていました…。」

ドウニヤがうつむきながら言った。

良かった。さっきのは気にされてないみたいだ。

「…何を？」

「私は本当にこのままでもいいのでしょうか、と…。」

「…？」

「あなたと初めて出会う頃こそ、周りが怖くて、ただ逃げ出すことだけ考えていました。」

「…。」

「それからあなたに命を救われ、あなたは私たちを匿うと言ってくれましたね。」

「ええ。」

「私はそのとき、本当に嬉しかった…。でも…。」

「でも、あなたに頼りきりでいいのでしょうか？…私の国、ムスタシムはマグノシユタツトによって滅ぼされ、父も母も殺されてしまいましたわ…。」

「…………。」

「私は王女として、一人生き残った王族として、自分の責務を全うしながらはならない…。マグノに復讐しないといけないんですわ…！」

ドウニヤの声に力がこもる。

王族としての責任感が、ここまで彼女を追いつめているのか。

まるで呪いだな。

「…復讐は…ダメですよ。」

「…あなたならそう言うと思いましたが。…でも、やらなきゃ。勝機がなくてもやらなきゃいけませんわ。」

「…。」

「私は彼らが憎い。私たちはただ、普通に生きていただけなのに…!!」

「…姫様」

「もう姫じゃありませんわ!!!」

「…私は運命が憎いですわ…。」

「ダメだ。復讐は絶対にさせない。」

ドウニヤの前に移動し、彼女の手を握る。

彼女はボロボロ泣いていて、その手は震えていた。

「今マグノシユタツトに刃向かえば、君はすぐ死ぬだろう。」

「……それでも……」

「いや、ダメだ。君は死んでしまった人たちのために、君を救おうとした人たちのためにも生きなさいけない。」

「!!」

「……。」

「…では、怒りを押し殺し、自らの責任を捨てて無様に生きながらえろと言うのですね…。」

ドウニヤは涙をいっぱいにためて言った。

俺は彼女の肩をつかむ。

「違う。」

「………え?」

「自らの責務だとか、復讐のためだとか、そういう考えがまず違う。君は、自分の好きなように生きていいはずだ。」

「…!?!」

「復讐が、君の本当にやりたいことか!?! 生きるのが嫌なのか!?! …違うだろう!?!」

「それは…。」

「…生きる希望を、生きる理由を、自分のやりたいことを見つけてください。」

「…。」

「生きる理由なんて、俺も最近見つけたばかりで、見つけるのは難しい。…考え抜いて考え抜いて、結局復讐なんだったら俺は止めない。」

「………。」

「…だけど、それが見つかるまで復讐はさせないし、無様に生きながらえてもらう。」

「…そんなの…!!」

「君は一人じゃないんだから、じっくり考えてみるよ。」

「…!!」

また、ドウニヤはボロボロ泣き出した。

俺は彼女を優しく抱きしめた。

押さえつけていたものが溢れたかのように、彼女は泣き続けた。

国や、復讐なんて、考えるのには彼女はまだ若すぎる。

これからイサクと、みんなとじっくり答えを探っていけばいい。

「…乙彦様は、大人なのですわ…。」

「大人だからな。」

しばらく泣いて落ち着いたドウニヤは話しかけてきた。

俺は大人だ。なぜならもう三十年も生きているからな。途中で一度死んだが。

「…私のほうが一つ年上ですわ…。」

「…春の俺の誕生日になったら、同じ年になるんじゃない?」

「それはそうですわね。」

そう言うと、何だかおかしくなったのかドウニヤはうふふと笑った。

俺はそれが愛らしくて、愉快で、はははと笑った。